

第1章 基本計画策定の考え方

1. 策定の趣旨

農業及び農村を取り巻く情勢の変化に対応し、食や農に対する県民の多様化する期待に応じていくとともに、将来にわたって農業が持続的に営まれる農村地域の確立に向け、めざすべき将来の姿とそれを実現するための施策の総合的かつ計画的な推進をはかるための基本的な計画として、策定する。

2. 計画の性格

県の食を担う農業及び農村の活性化に関する施策の基本となる計画であるとともに、農業者、関係機関をはじめ、消費者の方々の参加を得るなかで、三重県の「食」と「農」の活性化を進める指針となるもの。

3. 計画の期間

平成23年度(2011年度)から10年後を見通す。
なお、基本計画に基づく施策の着実な推進と的確なマネジメントを行うため、具体的な取組展開を示した「アクションプログラム」を策定する。

第2章 三重県の農業・農村をめぐる情勢

1. 食と農業及び農村を取り巻く環境の変化

- (1) 人口減少社会の到来
- (2) グローバル化の進展
- (3) 地球環境問題の深刻化と世界の食料事情
- (4) 人びとの価値観やライフスタイルの変化
- (5) 情報通信等技術革新の進展
- (6) 食料自給率の低下と国農政の転換

2. 三重県の農業及び農村の現状と課題

- (1) 耕地
 - ・耕地面積、耕作放棄地、耕地利用率、等の状況
- (2) 農業者
 - ・農家数、農業就業人口、認定農業者、農業生産法人、新規就農者、等の状況
- (3) 農業生産
 - ・農業算出額、食料自給率、農業所得、農産物・生産資材価格、6次産業化への取組、等の状況
- (4) 野生鳥獣による被害
 - ・鳥獣被害金額、等の状況
- (5) 農村社会
 - ・高齢化、混住化、生活基盤整備、農山漁村交流人口、等の状況

第3章 基本方針

1. 農業及び農村の活性化に向けた基本的な考え方

- (1) 農業及び農村の果たす役割
 - ①食料の持続的な供給
 - ②多面的機能の発揮
 - ③地域経済と就業の場を担う産業
- (2) 取組展開に向けた基本視点
 - ①消費者の視点に立った農業の展開
 - ②将来にわたる農業の持続的発展
 - ③地域の創意工夫を重視した施策の展開
- (3) めざすべき将来の姿
 - ①安全・安心な農産物が、安定的に供給されている姿
 - ②多様な農業経営が確立され、本県農業が持続的に発展する姿
 - ③地域の特性を生かした取組が展開され、農村が振興される姿
 - ④農業及び農村を起点として、新たな価値の創出がはかれる姿

2. 三重県の農業及び農村の活性化に向けた施策の展開

県民生活の安定と地域経済の健全な発展に資するため、農業及び農村の果たす役割を踏まえて、4つの基本施策と主要な目標を定める。

(1) 基本施策Ⅰ：安全・安心な農産物の安定的な供給

安全・安心な食料を県民等に安定的に供給するため、農畜産物の生産・流通体制の強化に取り組む。

目 標 項 目	2010年度【現状】	2020年度【目標】
食料自給率(カロリーベース)	43%(2008年度)	51%(2019年度)
耕地利用率(田畑計)	89%(2008年度)	98%(2019年度)
GAP、土づくり、投入資源の効率利用を総合的に進める産地の割合	5%	75%

(2) 基本施策Ⅱ：農業の持続的な発展を支える農業構造の確立

県農業が持続的に発展できるよう、意欲と経営感覚にあふれる多様な農業経営体の確保・育成に取り組む。

目 標 項 目	2010年度【現状】	2020年度【目標】
農業経営体数(認定農業者、集落営農組織等)	2,385経営体(2009年度)	3,000経営体(2019年度)
農業の安定的システムを確立している集落の割合	26.8%(2009年度)	75%
地域活性化プラン策定数	-	500

(3) 基本施策Ⅲ：地域の特性を生かした農村の振興と多面的機能の維持増進

農業及び農村が多面的機能を発揮できるよう、快適な農村環境の整備や都市や地域住民との連携構築に取り組む。

目 標 項 目	2010年度【現状】	2020年度【目標】
農山漁村地域の主要交流施設利用者数	4,957千人(2008年度)	5,270千人(2019年度)
野生鳥獣による農業被害金額	464百万円(2009年度)	324百万円以下(2019年度)
農村の資源保全活動組織数	315組織	500組織

(4) 基本施策Ⅳ：農業・農村を起点とした新たな価値の創出

県民の食と農との結び付きの強化と、農を起点とした新たな価値の創出に取り組む。

目 標 項 目	2010年度【現状】	2020年度【目標】
農業の価値創出に取り組む事業者数の伸び率	1.0	1.8
県内産品を意欲的に購入する人の割合	35.0%(2009年度)	70%
大都市圏への販路開拓に挑戦し成果を得た事業者の割合	46.5%(2009年度)	70%

第4章 推進体制の整備

1. 計画の推進体制

県、市町、農業者、関係団体等の担う役割を明確にし、適切な役割分担のもと、連携・協働を基本姿勢として計画の推進に取り組む。

2. 地域活性化プランへの支援

地域の創意工夫を重視した施策展開をはかるため、集落や産地等の主体的な取組を支援する仕組みとして、市町や関係団体との連携・協力体制を構築し、地域の取組意欲の増進をはかりつつ、地域活性化プランの策定と実践に対する支援に取り組む。

三重県食を担う農業及び農村の活性化に関する基本計画
(中間案)

三 重 県

第1章 計画策定の考え方

1 策定の趣旨

三重県の農業及び農村は、南北に長く、また、海岸線から山脈に至る多様な地形を有する県土や、四季の変化に富んだ自然環境のもと、農業者のたゆみない取組と農村地域での協働活動のもと、新鮮で安全・安心な農産物を、県民をはじめとする多くの消費者に安定的に供給しています。また、農業の営みを通じて、洪水防止などによる県土の保全、豊かな農村景観の形成、過去から培われてきた伝統文化の伝承など、県民生活の安定と向上に寄与する重要な役割を果たしており、地域住民をはじめ、三重県を訪れる人びとにも安心感やこころの豊かさを提供しています。

しかしながら、三重県の農業及び農村は、高齢化や過疎化、耕作放棄地の増大が急速に進行している状況にあり、農産物価格の低迷と相まって生産力や食料安定供給力、農村活力の低下が進むなど厳しい状況に置かれています。

一方で、国際的にはWTO（世界貿易機関）などによるグローバル化が進展する中で、国内では国産食料に対する消費者のニーズが高まっていることなどをふまえて、国の新たな「食料・農業・農村基本計画」に基づき、食料自給力の向上に向けた取組や消費ニーズに対応した付加価値向上が重点的に進められるなど、農業及び農村を取り巻く環境は大きな転換期を迎えており、今後こうした状況に対応していくことが求められています。

加えて、「物の豊かさ」だけでなく「心の豊かさ」を重視するなど、社会の成熟化にともなって県民が求める豊かさのかたちに変化してきている中で、BSE（牛海綿状脳症）の発生や食品の不正表示、輸入食品等での残留農薬問題などを契機として、県民の健康や食の安全に対する関心が高まるとともに、温室効果ガスの増加との関連が指摘される気候変動など地球規模での環境問題が深刻になってきています。

このような情勢の中、これら諸課題への的確な対応をはかるためには、「食」や「農」に対する県民の多様化する期待に応えていくとともに、将来にわたって農業が持続的に営まれる農村地域の確立をめざして取り組んでいくことが重要であり、三重県の農業及び農村が活気に満ちあふれ、元気で魅力ある姿の実現に向けて、これまで培われてきたさまざまな知識や知恵、能力を生かして、農業及び農村の活性化に取り組んでいく必要があります。

この計画は、こうした認識のもとで、県民の健全で豊かな食の実現と、三重県農業及び農村の持続的な発展に向けて、「三重県食を担う農業及び農村の活性化に関する条例」に基づき、めざすべき将来の姿とその実現のための施策の総合的かつ計画的な推進をはかるための基本的な計画として策定するものです。

2 計画の性格

この計画は、県民各層の意見を反映し、「三重県食を担う農業及び農村の活性化に関する条例」第9条第1項の規定に基づく基本計画として知事が定めるもので、三重県の食を担う農業及び農村の活性化に関する施策の基本となる計画であるとともに、農業者、関係機関をはじめ、消費者等のさまざまな方々の参加を得る中で、三重県の「食」と「農」の活性化を進めるうえでの指針となるものです。

また、農業者や農業団体、市町には、農業及び農村の振興に向けた取組を進めるための

共通の指針として、さらに、県民には、農業及び農村の振興に理解を求めるとともに、自らの健全で豊かな「食」の実現のために「食」と「農」との望ましい関係づくりへの参画を進めるための指針として、利用されることを期待しています。

3 計画の期間

この計画は、2011年度（平成23年度）を初年度とし、2020年度（平成32年度）を目標年とする10か年計画とし、農業及び農村を取り巻く情勢の変化に的確に対応し、効果的かつ効率的な農政展開をはかることができるよう、おおむね5年ごとに見直します。

なお、基本計画に基づく施策の着実な推進と的確なマネジメントを行うため、具体的な取組展開を示した「アクションプログラム」を策定することとします。

第2章 三重県の農業及び農村を取り巻く情勢

1. 食と農業及び農村を取り巻く環境の変化

(1) 人口減少社会の到来

「日本の将来推計（平成18年12月推計）」（人口国立社会保障・人口問題研究所）によると、2030年（平成42年）には全国の人口が115,224千人（中位推計）、2005年（平成17年）から約10%減少すると予測されるとともに、実際に2006年（平成18年）には減少に転じています（「平成21年人口動態調査」（厚生労働省））。

県の人口は、県経済の発展に伴ってこれまで順調に増加を続けてきましたが、2008年の約187万人をピークに、2009年（平成21年）には約7千人減少し、10月1日現在の推計で186万2,575人となっています。

また、県の将来人口は、「都道府県の将来人口推計（平成18年12月推計）」人口国立社会保障・人口問題研究所によると、2030年には1,779千人（中位推計）、2005年から約5%減少すると予測されており、全国と比べて減少幅は少ないものの、経済の縮小やコミュニティの弱体化などの影響を生じる可能性があることから、地域活力の低下につながるなどが懸念されています。

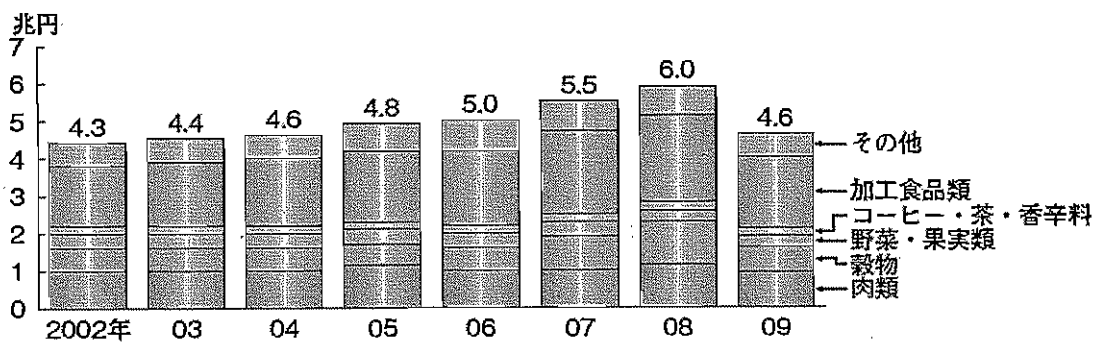
(2) グローバル化の進展

人や物はもとより、近年の情報通信技術の進展により情報のグローバル化が進み、円高の進展や世界的な貿易自由化の流れの中で、食生活の多様化等を背景に、農産物をはじめとする食料輸入は大きく増加しました。

このため、WTO（世界貿易機関）農業交渉やEPA（経済連携協定）・FTA（自由貿易協定）に関する交渉、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の事前協議が進められる中で、農産物に関する交渉の動向について注視しながら、海外との競争をふまえた生産・販売戦略を構築していくことが求められています。

一方で、アジア諸国においては、急速な経済成長による所得水準の上昇を背景として、高品質な食料品等に対するニーズが高まってきていることから、日本の食文化に関する関心や日本製品のブランドイメージ等を背景として、県産農産物等の輸出の可能性も生まれてきています。

<日本の農産物輸入額の推移>



※2009年は、円高ドル安の進行、穀物価格の低下等により大きく減少

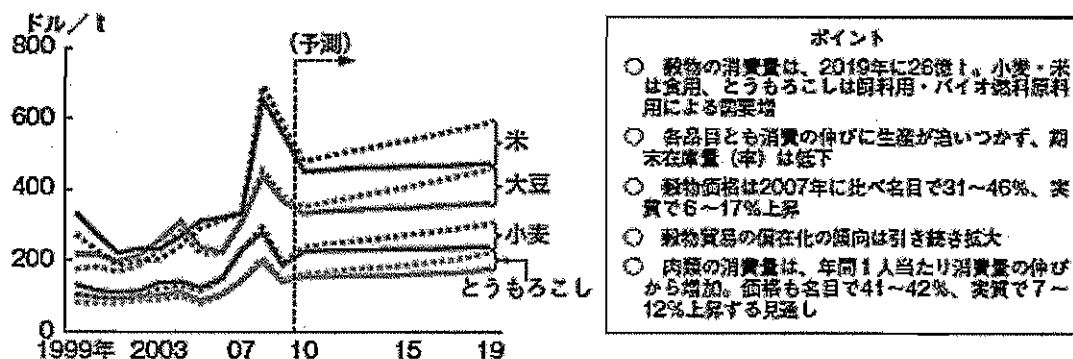
（出展：農林水産省「平成21年度食料・農業農村の動向」、財務省「貿易統計」を基に農林水産省が作成）

(3) 地球環境問題の深刻化と世界の食料事情

産業革命以降、人間の社会経済活動が著しく増大した結果、大気中の二酸化炭素などの温室効果ガスが増加していることにより、平均気温や海面水位の上昇など、地球規模での気象変動（いわゆる地球温暖化問題）が生じるとともに、世界の食料生産影響を及ぼす可能性が指摘されています。

一方で、食料をめぐる国際情勢は、発展途上国を中心とした人口の増加や BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）等新興国での所得向上による食生活の変化、気象変動による異常気象の頻発や栽培適地の変化等地球温暖化に伴う農業生産への影響、バイオ燃料の生産拡大に伴う穀物等の原料としての利用量の増加などによって、世界の食料事情が不安定さを増してきていることから、国内における食料自給力の向上が課題となっています。

<穀物等の国際価格の推移と見通し>



※波線は名目価格、実線は実質価格

(出展：農林水産省「平成 21 年度食料・農業農村の動向」、農林水産政策研究所「2019 年における世界の需給見通し」(2010 年 2 月公表))

(4) 人びとの価値観やライフスタイルの変化

日本は、これまで、経済的な豊かさや利便性などを高めることに重点がおかれてきましたが、社会の成熟化に伴って個人の価値観やライフスタイルの多様化が進み、県民の意識は「物の豊かさ」だけでなく「心の豊かさ」をより大切にするようになってきています。

豊かな自然や文化、農山漁村の心豊かなくらしを求めたり、ボランティアやNPOなどによる社会貢献活動に参加したりする人が増加するなど、一人ひとりが互いの個性や能力、違いを認め合い、それぞれの価値観に基づいて人生やライフスタイルの選択の可能性を広げていくことが必要となっています。

また、度重なる食品の不適正表示や輸入食品等の残留農薬、地球温暖化問題等の発生により、食の安全・安心をはじめ、環境や健康、本物志向などが高まってきた一方で、2008年（平成 20 年）秋に発生した世界同時不況の影響による経済情勢の急激な悪化等により、食料品購入における低価格志向も見られるなど、食に対する県民や消費者のニーズはますます多様化してきています。

(5) 情報通信等技術革新の進展

インターネットや携帯電話等によるIT（情報通信技術）の発達は、新しい産業分野の創出や既存産業に影響を与えることにより、さまざまな産業の成長に寄与するとともに、人びとのライフスタイルにも大きな影響を与えています。

農業においては、インターネットを活用した農産物の通信販売やトレーサビリティシステム（生産履歴管理）、GPS（人工衛星によるグローバル測位システム）やレーザーを用いた農業機械の精密・自動運転等による農作業システム、コンピュータを用いた総合的な栽培環境制御を行う植物工場や画像カメラ等によるセンシング技術を用いた自動収穫装置の開発・導入など、IT活用によるさまざまな取組が進められています。

また、地球温暖化問題等を背景に新エネルギーへの関心が高まる中で、穀類等を利用した燃料の製造が行われるとともに、稲わら等収穫残さを使用する技術、農業用水を用いた小水力発電技術の実用化や普及のための取組が進められるなど、バイオマス等の自然エネルギー活用に向けた動きが加速しています。

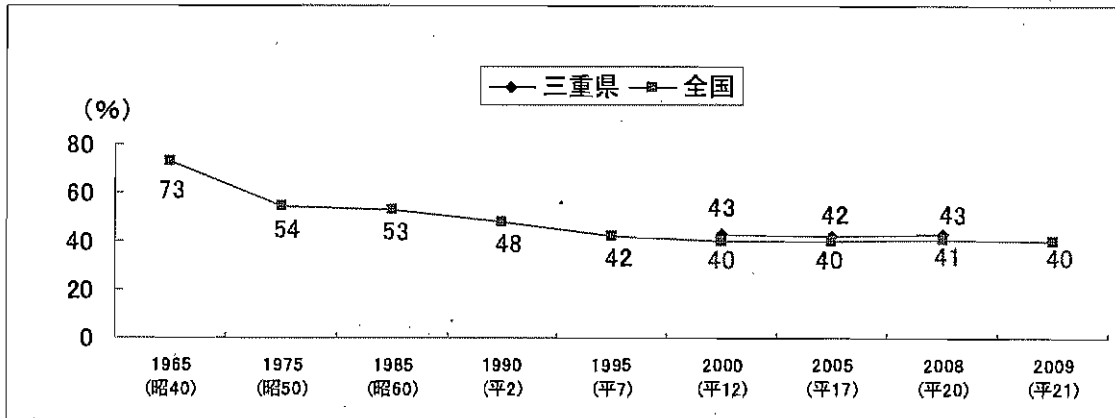
こうした技術革新は、今後さらに進展していくものと予測されることから、農業分野においても先端的技術を積極的に取り入れ、活用していく視点が求められています。

(6) 食料自給率の低下と国農政の転換

日本人の食生活が大きく変化し、国内で自給可能な米の消費が減る一方、国内生産では供給困難なとうもろこし等の飼料穀物を必要とする畜産物や、大豆やなたね等を使用する油脂類の消費が増加したこと、農業従事者の高齢化や減少等により国内の食料供給力が低下したこと等から、国や県の食料自給率（カロリーベース）は40%程度にまで低下しています。

こうした状況をふまえて、国は2010年（平成22年）3月に、食料・農業・農村政策を国家戦略の一つとして位置づけ、大幅な政策の転換をはかることを明記するとともに、2020年（平成32年）の食料自給率（カロリーベース）を50%に高めることを目標に掲げる新たな食料・農業・農村基本計画を策定しました。なお、国の新たな基本計画においては、意欲ある者の創意工夫を引き出し、農業及び農村の潜在力が最大限に発揮され、国民が将来に向けて新しい展望を描くことができるよう、戸別所得補償制度の導入、「品質」、「安全・安心」といった消費者ニーズに適った生産体制への転換、6次産業化による活力ある農山漁村の再生という新たな理念に基づく施策を基本に、各般の施策を一体的に推進する政策体系に農政を転換させ、「食」と「地域」の早急な再生をはかっていくことが明記されています。

<食料自給率（カロリーベース）の推移>



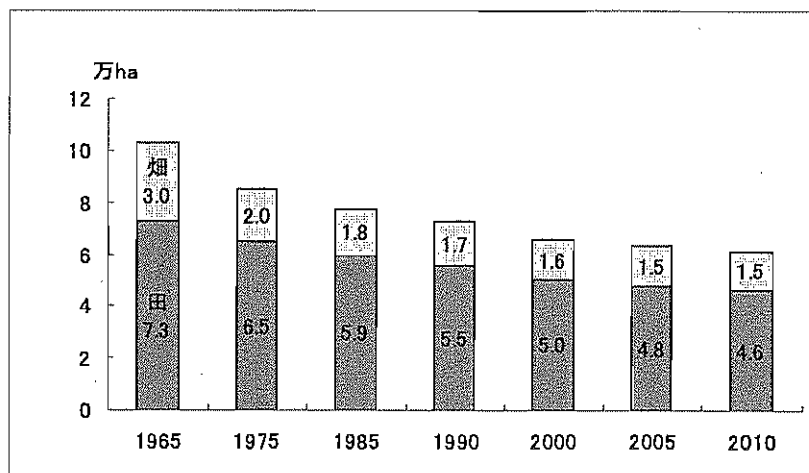
(資料：農林水産省「食料自給率の推移」「都道府県別食料自給率の推移」)

2. 三重県の農業及び農村の現状と課題

(1) 耕地

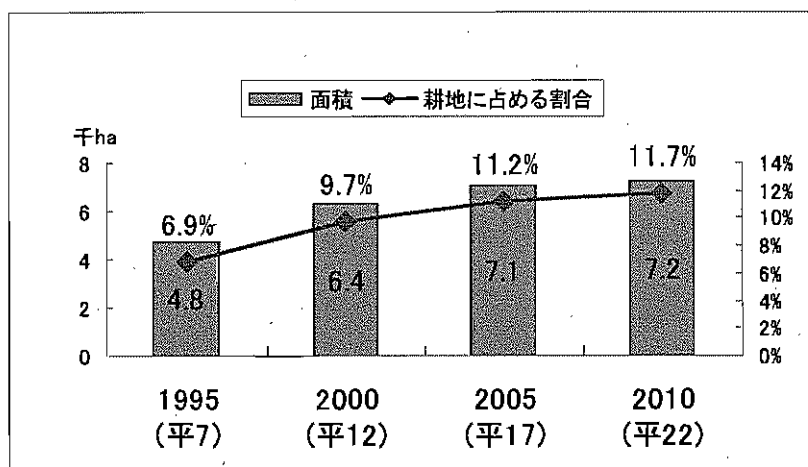
- ◆耕地面積は、年々減少してきています。2000年（平成12年）から2010年（平成22年）までの直近10年間で、耕地面積の約6.4%にあたる、約4,200haが減少しました。
- ◆耕作放棄地面積は、生産条件が不利な中山間地域を中心に増加してきており、2010年（平成22年）には県全体で7,223ha、全耕地に占める割合は11.7%となっています。
- ◆耕地利用率は、農業及び農村が置かれた厳しい情勢を反映して年々低下してきており、水田における麦・大豆等戦略作物の生産拡大の取組によって2008年（平成20年）にはわずかに上昇しているものの、依然として90%を下回る水準で推移しています。
- ◆県民等への食料の持続的な供給や、洪水防止をはじめとする農地のもつ多面的機能を維持していくためにも、県内の優良農地を維持・保全し、食料生産の基盤を強化していくための農地の適正な管理や有効利用をはかっていくことが重要な課題となっています。

<耕地面積の推移>



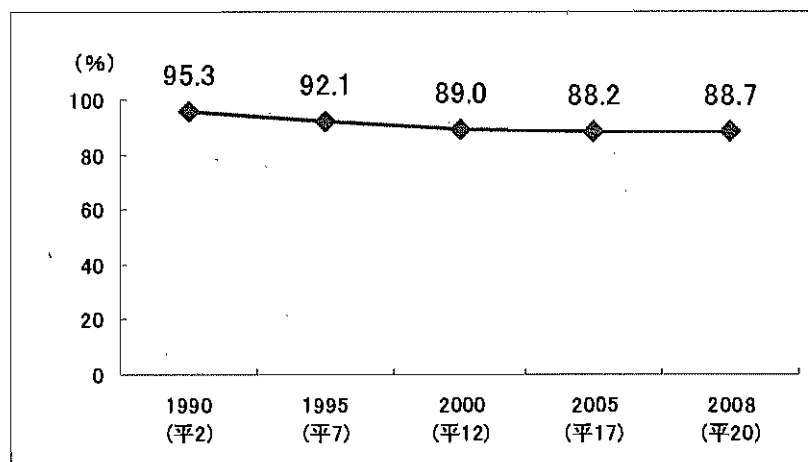
(資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」)

<耕作放棄地面積の推移>



(資料：農林水産省「農林業センサス」)

<耕地利用率の推移>



(資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」)

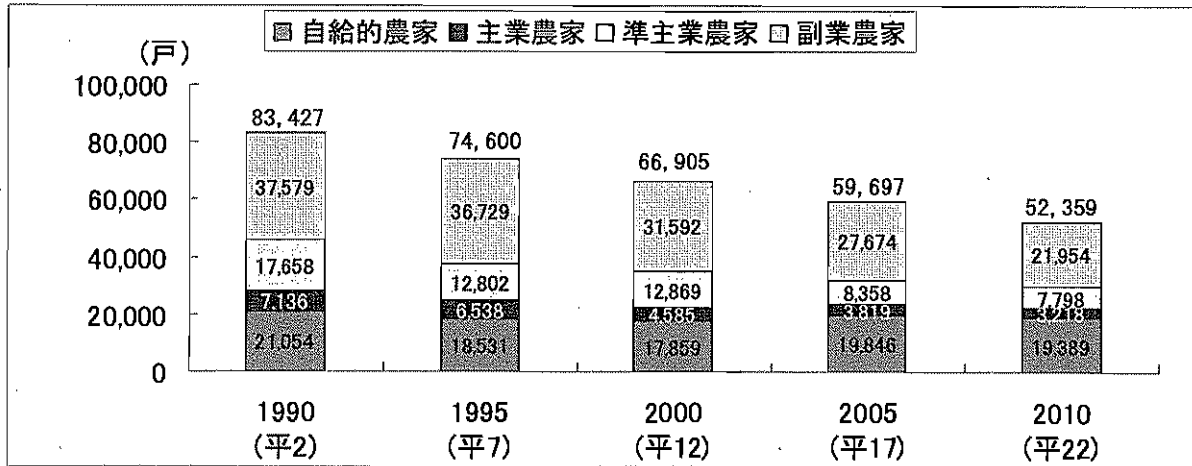
(2) 農業者

- ◆ 農家数は年々減少してきており、2010年までの直近10年間で約20%減少しています。
- ◆ 農業就業人口は、2010年までの直近10年間で約40%減少するとともに、2010年には65歳以上が74%を占め、高齢化が進んでいます。
- ◆ 認定農業者や農業法人など、意欲と経営感覚に優れた経営体数は、増加傾向にあります。また、企業等、農業生産法人以外の法人についても、2009年度末時点で9法人が農業経営に参入しています。
- ◆ 新規就農者数は、農業法人等への就職も含めて、近年、50人から70人程度で推移してきましたが、2009年度には厳しい雇用・経済状況を反映して143人の新規就農がありました。
- ◆ 農業従事者の高齢化の進行や担い手不足等の農業及び農村を取り巻く状況をふまえると、規模拡大や経営発展をめざす企業的な経営体の確保・育成や、新規就農者をはじめ

めとする新たな農業参入の拡大をはかることが重要な課題です。

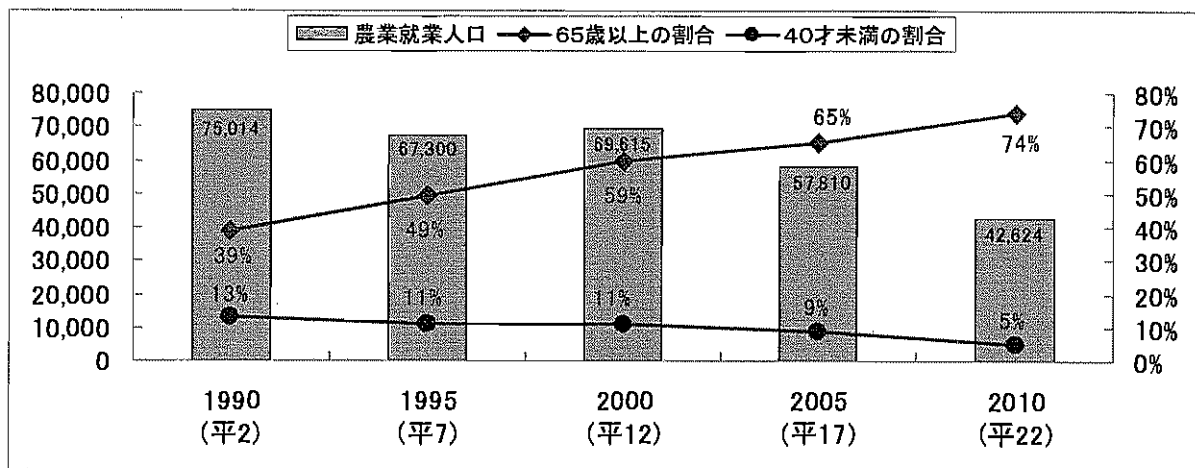
◆地域の農地や集落を維持していくための集落営農組織等の育成や集落等の地域を単位とした土地利用調整のしくみづくりも求められています。

<農家数の推移>



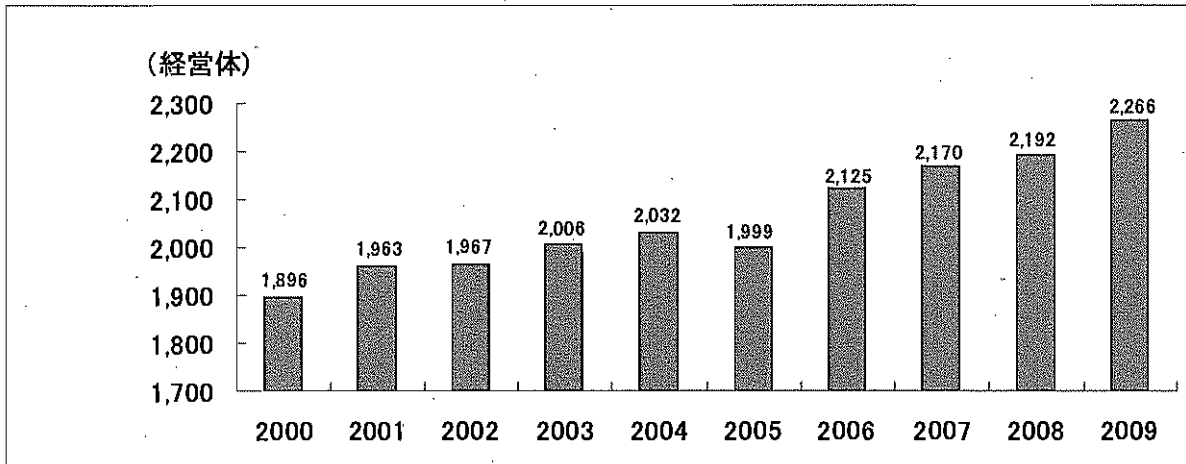
(資料：農林水産省「農林業センサス」)

<農業就業人口の推移（販売農家の、主として農業に従事した世帯員数）>



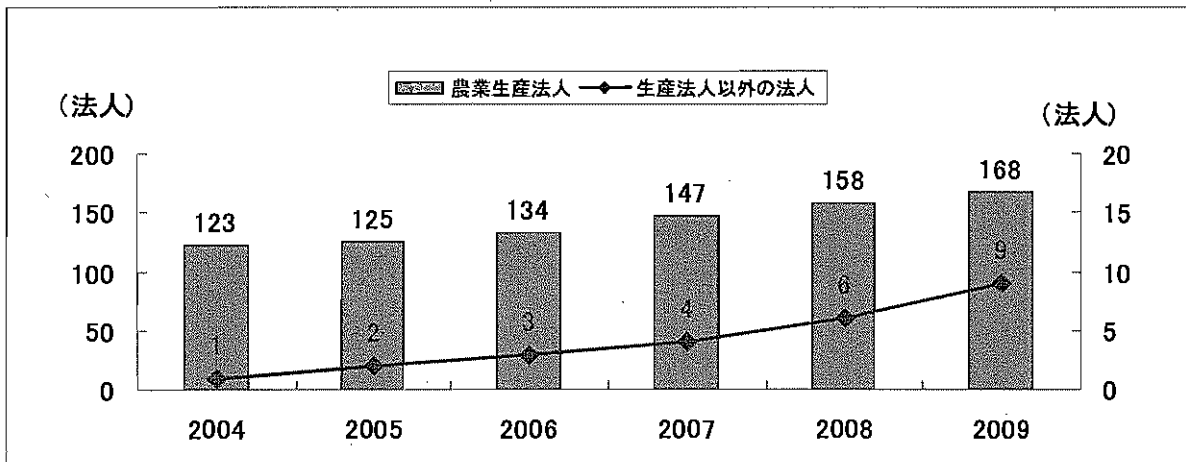
(資料：農林水産省「農林業センサス」)

<認定農業者数の推移>



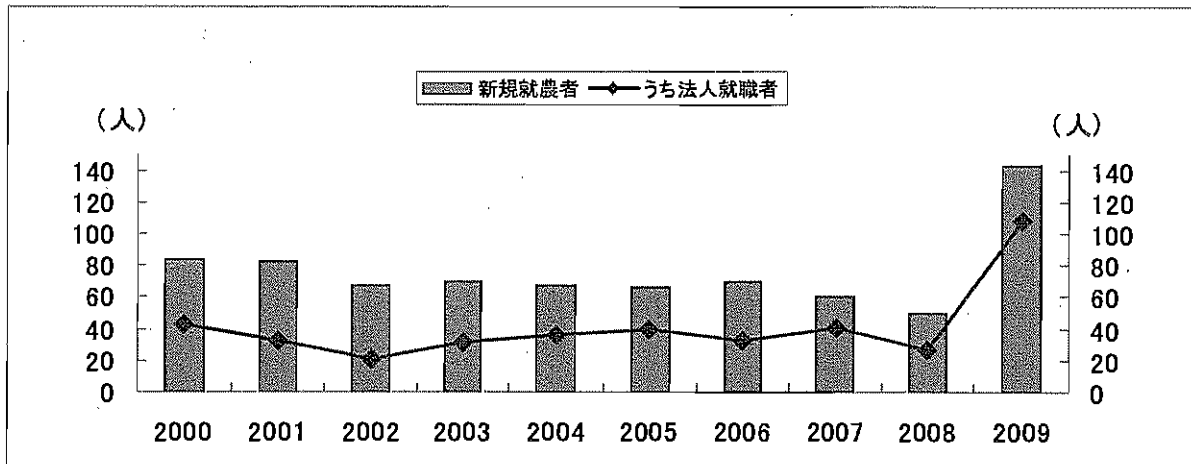
(資料：農業経営室調べ)

<農業生産法人数の推移>



(資料：農業経営室、農地調整室調べ)

<新規就農者数の推移>

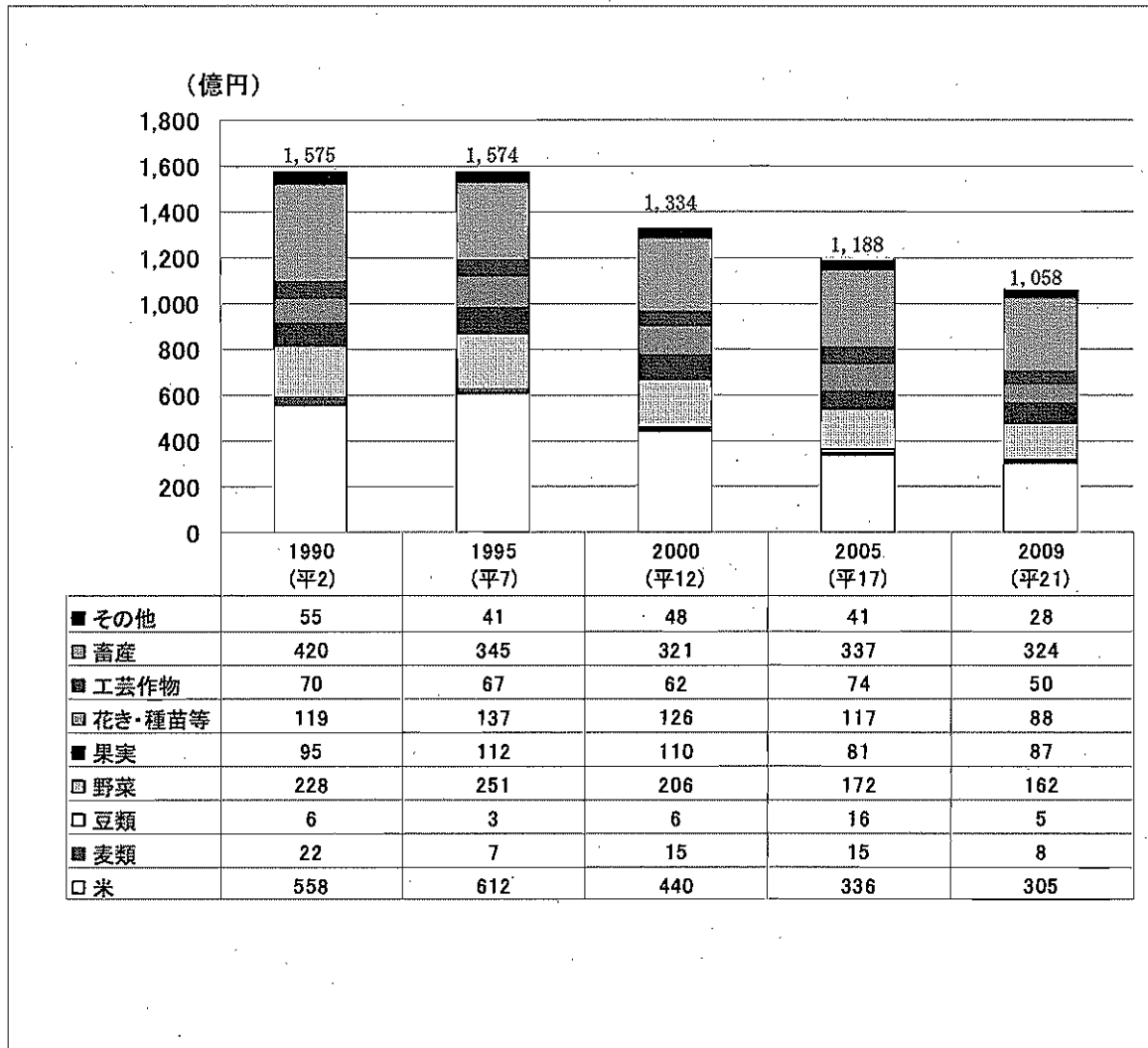


(資料：農業経営室調べ)

(3) 農業生産

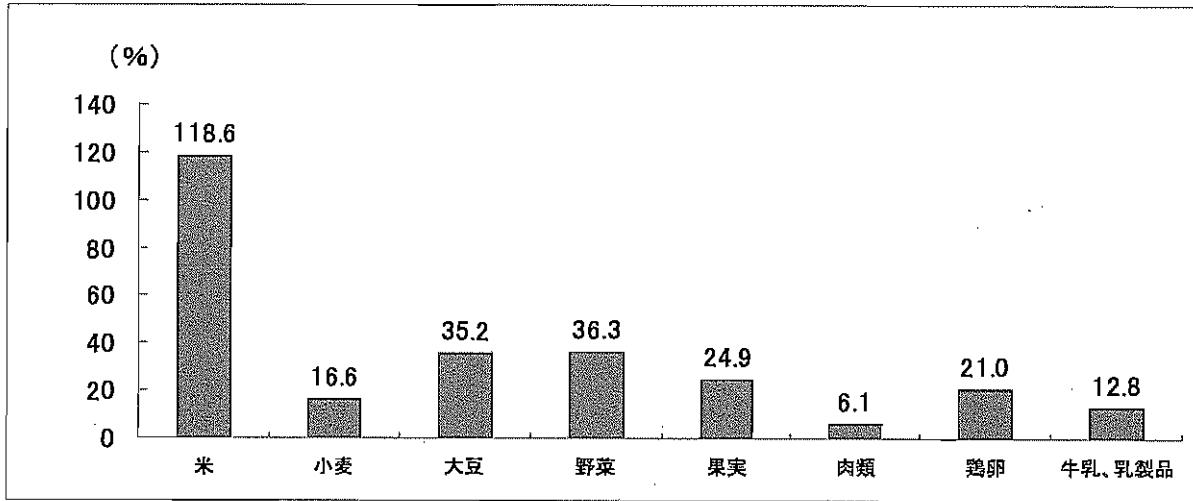
- ◆三重県の農業算出額は、2009年に1,058億円で、このうち、米と畜産がそれぞれ30%程度を占めています。
- ◆1990年の1,575億円と比較して33%の減少となっており、水田の割合が7割を超えるなど稲作依存度が高い三重県農業の実状から、米価の低迷や米の生産調整が大きく影響しています。
- ◆農業資材価格等は年々上昇傾向にあるとともに、特に近年は、世界的な肥料需要の増大を背景として肥料原料価格が高騰する事態が生じるなど、燃油高騰などとともに農業経営を圧迫する要因の一つになっています。
- ◆三重県の販売農家は兼業機会に恵まれたことなどにより農業依存度が低い特徴がありますが、2008年には1戸あたりの農業所得がマイナスとなるとともに、バブル崩壊以降の景気低迷の長期化などの影響から農外所得が大きく減少したことで相まって、農家所得が減少してきています。
- ◆農業者が行う農業生産関連事業（いわゆる「6次産業化」）への取組状況については、直売を行った経営体の割合が2010年に34%まで増加するとともに、農産物の加工を行う経営体をはじめとして、貸農園・観光農園等、農家民宿・農家レストランに取り組む経営体が着実に増えてきています。
- ◆国や県の食料自給率（カロリーベース）や農業経営を取り巻く厳しい状況等を踏まえると、安全・安心な農産物等が安定的に供給されるよう三重県の食料自給力の強化をはかるとともに、意欲ある農業者が持続的・発展的に経営を展開していくことができるよう、収益性の向上や新たな需要の創出に向けて6次産業化や農商工連携への取組の促進が求められています。

＜農業産出額の推移＞



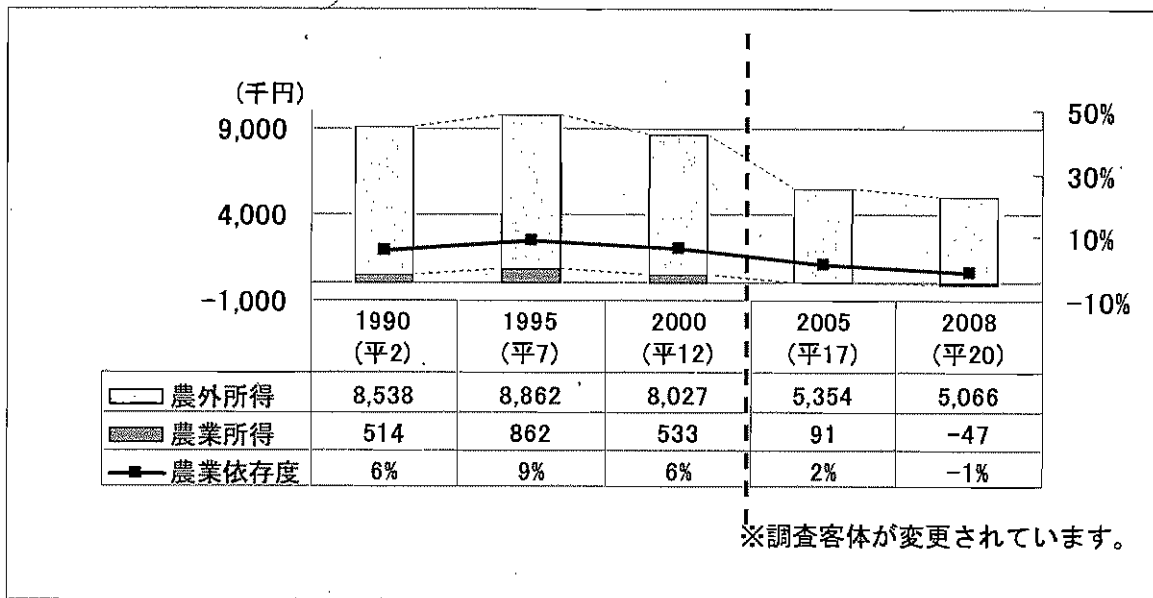
(資料：農林水産省「農林水産統計年報」)

<主要農産物別の自給率（カロリーベース）>



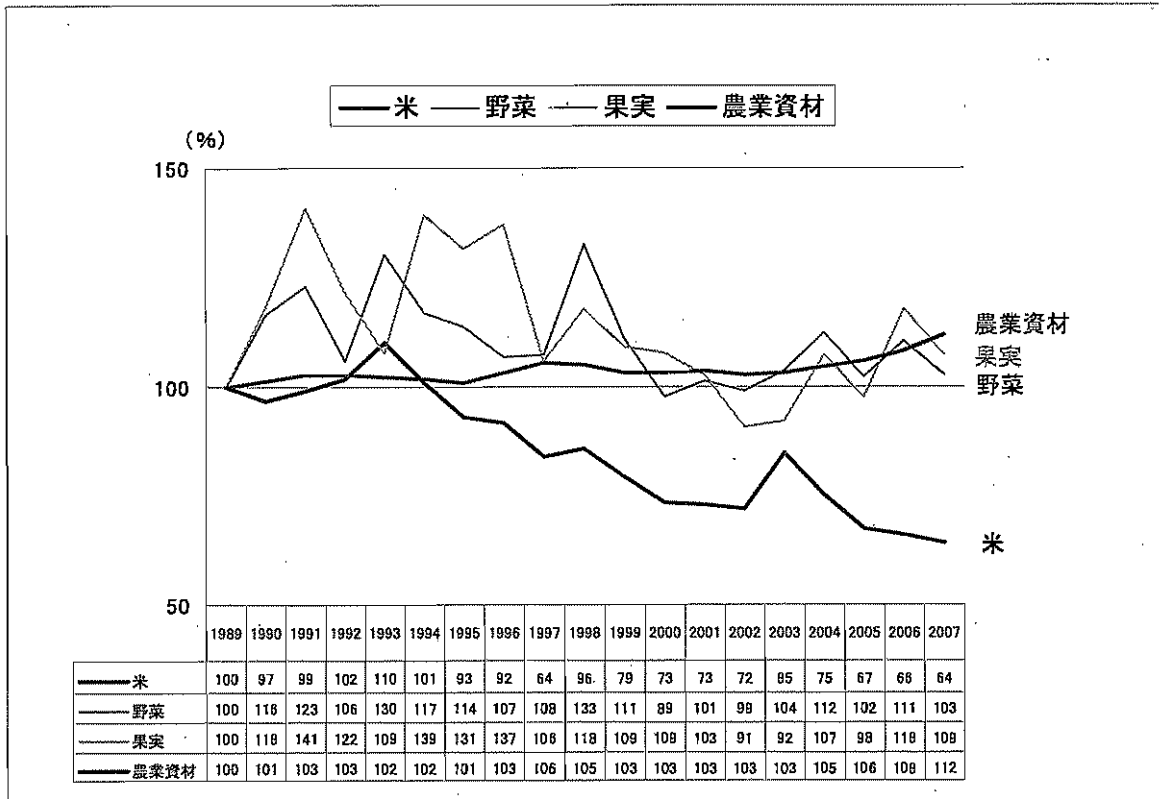
(資料：農林水産省「農林水産統計年報」「食料需給表」等による農業経営室推計)

<販売農家1戸あたりの農業所得等の推移>



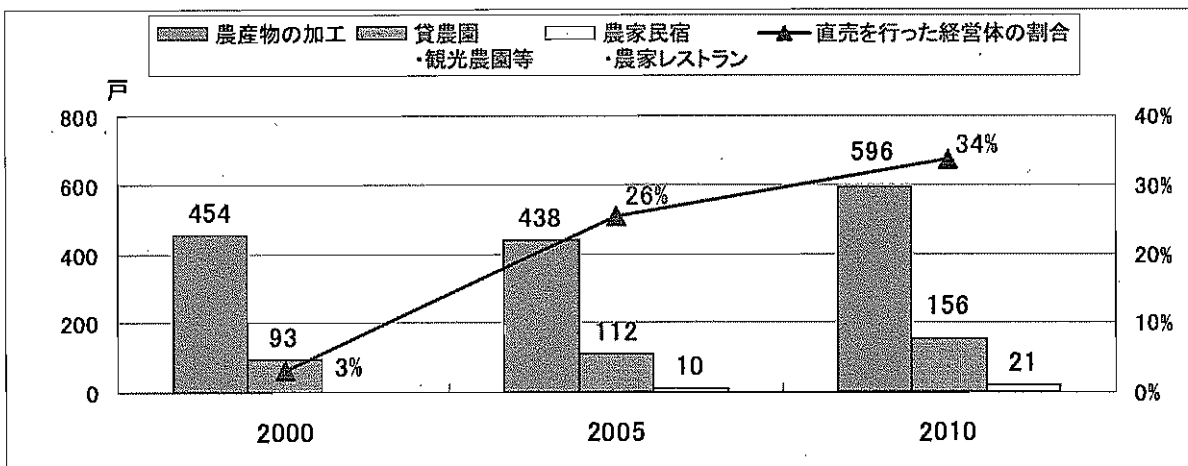
(資料：農林水産省「農林水産統計年報」)

<主な農産物及び農業生産資産価格の推移>



(資料：農林水産省「農林水産統計年報」)

<農業者の6次産業化への取組状況>

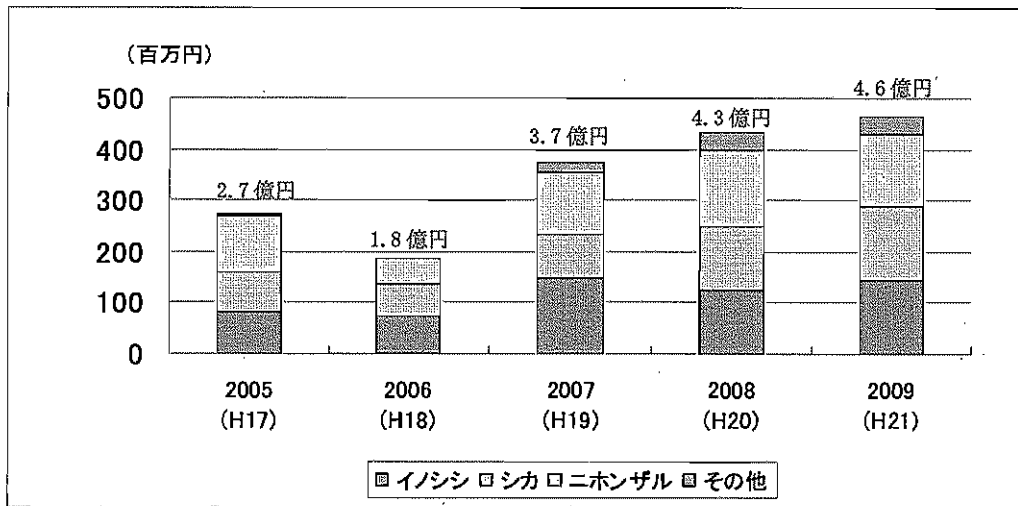


(資料：農林水産省「農林業センサス」)

(4) 野生鳥獣による被害

- ◆野生鳥獣による農作物被害は近年増加傾向にあり、2009年には約4.6億円となるなど、深刻な状況が続いています。
- ◆中山間地域の農業者を中心に生産意欲の減退等深刻な影響が生じてきていることから、有害鳥獣に対する効果的な被害防止対策等を総合的に講じていく必要があります。

<野生鳥獣による農作物被害額の推移>

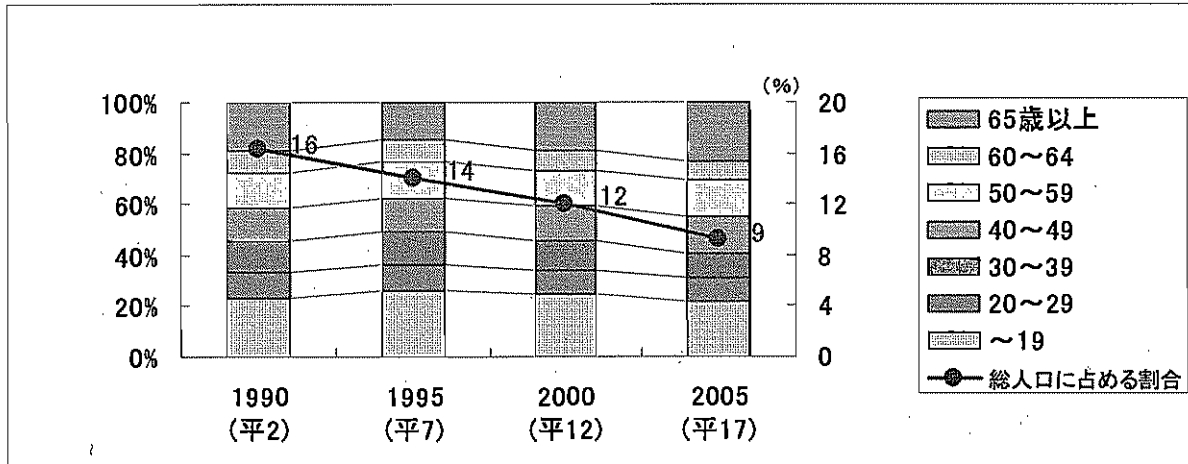


(資料：農山漁村室調べ)

(5) 農村社会

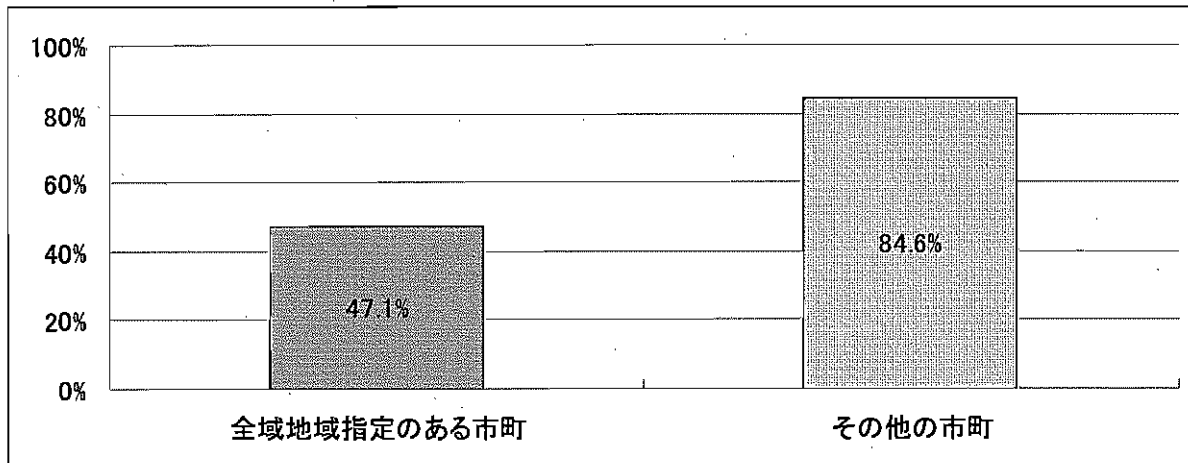
- ◆農家世帯の年齢構成を見ると、2005年までの直近10年間で販売農家の世帯員に占める65歳以上の割合が確実に高まってきています。
- ◆県の総人口に占める販売農家世帯員の割合が2005年には9%となるなど、農村地域における混住化が進んできていることが伺えます。
- ◆農山漁村地域における生活排水整備率が他地域と比較して低い水準にあると推測されるなど、農村漁村地域の生活環境整備がまだまだ十分でないことが伺えます。
- ◆農山漁村地域を訪れる都市農村交流人口は年々増加し、2008年には410万人を超える人が県内の農山漁村での交流活動等を行っています。

＜農家人口（販売農家の世帯員）の年齢別割合の推移＞



(資料：農林水産省「農林業センサス」、総務省「国勢調査」)

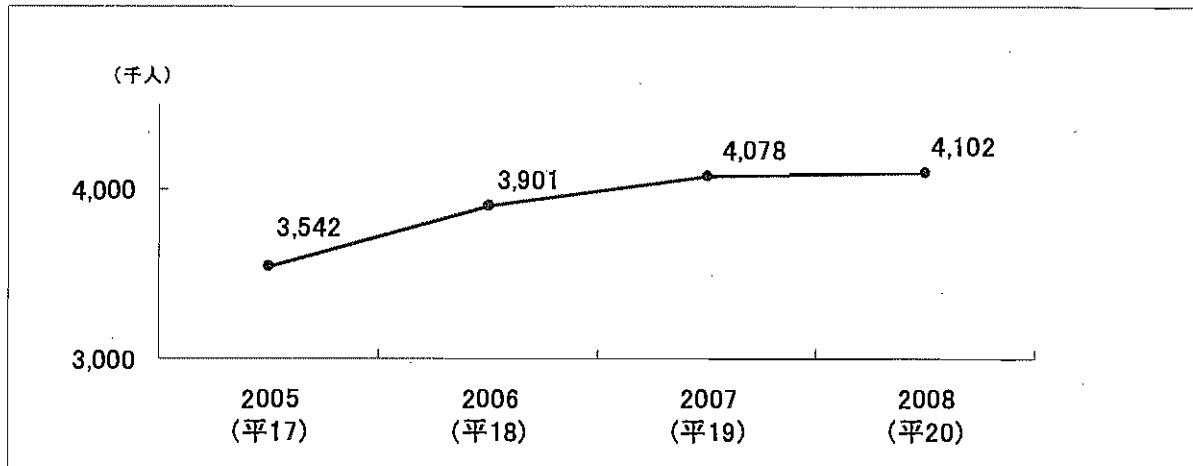
＜農山漁村地域等における生活排水処理施設整備率（2009年度）＞



※全域地域指定とは、全域で特定農山村・振興山村・過疎地域のいずれかの指定を受けているか、全域で半島振興地域の指定を受けかつ一部地域で特定農山村・振興山村・過疎地域のいずれかの指定を受けている市町。

(資料：水質改善室調べをもとに農業経営室で作成)

＜農山漁村地域の主要交流施設利用者数の推移＞



(資料：県内の59施設を対象とした農山漁村室調べ)

第3章 基本方針

1. 農業及び農村の活性化に向けた基本的な考え方

(1) 農業及び農村の果たす役割

役割1 食料の持続的な供給

食料は、人間の生命の維持に欠くことのできないものであるとともに、健康で充実した生活の基礎として重要なものです。このため、安全性が確保され、安心して安定的に消費できる食料が、将来にわたって、持続的に供給される必要があります。

しかし、国内での食料供給力は依然低位で、農業従事者の高齢化の進展など将来的な農業生産の不安定要素もある一方、国際的には、地球的な気候変動や途上国での人口増加などから、中長期的には食料需給の逼迫が不安視されるなど、食料を取り巻く状況は予断を許さない状況にあります。

三重県においても、県段階のカロリーベースの食料自給率は2008年度（平成20年度）で43%と横ばい傾向にあることから、今後、需要に応じた食料の供給力を向上し、安心して食べられる農産物を安定的に供給することにより、県民への食料供給の安心感を醸成していく役割を果たしていく必要があります。

役割2 多面的機能の発揮

農業及び農村は、農産物を安定的に供給する基本的な役割とともに、農業生産や農村地域のさまざまな活動を通じて、県土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等の多面的な機能を有しています。

特に三重県の農業及び農村は、南北に長く、また、海岸線から山脈に至る多様な地形と気候の中で、地域ごとに特色のある農業生産活動と相まって、さまざまな二次的な自然、農村景観や歴史・文化を有しています。また、中規模都市が連坦する三重県の都市構造とあいまって、こうした多面的機能を県民生活の場へ身近に提供しています。

県民がゆとりと豊かさを実感できる暮らしをおくるうえで、農業及び農村が発揮する多面的機能は欠くことのできないものであり、将来にわたり持続的に多面的機能を発揮していく役割があります。

役割3 地域経済と就業の場を担う産業

三重県の産業全体から見れば農業の占める割合は小さいものですが、近年、大規模な農業経営や農業法人などの企業的な経営が生まれつつあるとともに、他産業からの農業参入する企業も現れてきています。

また、農産物直売所や大規模小売店内の農産物直売コーナーなどを通じて、直売に取り組む農業者が増加しており、その販売額も年々増加するなど、地域に新たな活力を生み出してきています。

さらに、食品産業と連携した新商品の開発、地域の自然や景観を生かした集客ビジネス、加工や販売に一体的に取り組む6次産業化など、新たな価値創出への取組も育ちつつあります。

こうした新たな農業及び農村の活動は、地域経済の循環と地域就業の場として大きな

役割を担っています。

(2) 取組展開に向けた基本視点

農業及び農村を取り巻く環境は大きな転換期を迎えており、今後、こうした状況に的確に対応し、農業及び農村の果たすべき役割を持続的に発揮していくためには、中長期を見通した新たな発想での確かな視点をもって農業及び農村の活性化に取り組んでいくことが必要です。

また、三重県の農業及び農村を次の世代に継承していくためには、最も身近でその恩恵を享受している県民一人ひとりが県産農産物に込められた農業及び農村の価値を適正に評価し、日々の生活の中で積極的に選択するとともに、県民の皆さんの理解と行動に支えられた農業者や食品産業事業者が質の高い食料を合理的な価格で供給する努力を続けていくことが極めて重要となります。

こうしたことを踏まえて、本計画を策定するにあたっては、「消費者の視点に立った農業の展開」「将来にわたる農業の持続的発展」「地域の創意工夫を重視した施策の展開」の、3つを基本視点としました。

これら基本視点を施策展開のベースに置いて、関係する主体の皆さんの自主的で継続性のある取組を促しながら、将来にわたって県民の皆さんが豊かな三重県の「食」の恩恵を享受でき、農業者や食品産業事業者が誇りと希望をもって生産活動に取り組むことができる社会の実現をめざします。

基本視点① 消費者の視点に立った農業の展開

農業及び農村の果たすべき基本的な役割である農産物を安定的に供給していくためには、持続的な生産体制を構築するだけではなく、安全・安心、新鮮、高品質、手頃な価格、健康など、消費者の食に対する多様化するニーズに応え、マーケットで支持される農産物を生産していくことが極めて重要です。

市場流通での産地間競争の激化に加え、市場外流通の増大、大型量販店による寡占化、外食や中食需要の増加などマーケットの動向が劇的に変化している中、マーケットで支持される農産物を生産することは、安定的な取引関係を構築し、ひいては儲かる農業につながっていくものです。

このため、食育などを通じた消費者との相互理解の促進や地産地消の定着をはかる中で、消費者のニーズを的確に受けとめるマーケットインの発想やニーズを先取りした需要創造型農業の考え方などを意識した経営計画の策定を促すとともに、流通事業者との商談機会や消費者への直接販売の機会の創出などに取り組み、農産物の生産をはじめ、加工や流通なども含め、常に消費者の視点に立った考え方を重視した農業展開の定着を進めていきます。

基本視点② 将来にわたる農業の持続的発展

農業は、土と水と太陽から、価値ある産物である農産物を生み出すとともに、農産物生産といった単に経済的な活動だけではなく、県土の保全、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承など、県民生活にゆとりと豊かさを提供する経済価値だけでは計

れない役割（多面的機能）を発揮するといった他の産業にはない特徴をもっています。

こうした農業及び農村のもつ産業としての特徴を継続的に発揮し、安全・安心な農産物の安定的な供給や多面的機能の維持・増進など、県民の期待に応えていくためには、農業及び農村の活動が将来に向けて持続していくことは、その前提となります。

三重県の農村では、安定的な兼業機会に恵まれており、これまで兼業の農業従事者によって農業が支えられてきましたが、近年、その高齢化や新たに農業従事する跡継ぎ等の減少など、農村での農業の労働力構成が大きく変化してきています。このような新たな状況に対応できる合理的で持続的な営農システムを改めて構築していく必要があります。

このため、国の戸別所得補償制度を前提としつつ、農業従事が困難となった農地の円滑な利用調整を地域で進める土地利用調整システムの定着をはじめ、これら農地の営農を担う認定農業者や特定農業団体などの農業経営体の育成・強化とともに、意欲ある若者の新規就農の促進、組織的な農地保全をはかる集落営農や、退職人材の回帰就農の促進、他産業からの企業参入の促進など、持続的な生産体制構築に向けた重層的な対策を進めていきます。

基本視点3 地域の創意工夫を重視した施策の展開

農業及び農村の活性化をはかっていくためには、地域の農地、環境、農業に係る知識や文化など農村の資源を有効に活用しつつ、これらを有機的に結びつけ、地域の総合力を動員して、地域全体で生み出していく価値を高めていくことが重要です。

その価値を高めていく方向には、農業生産の維持や効率化を狙った取組から、農産物生産に加え、加工、流通、集客交流などに広がる6次産業や農商工連携など素材供給産業からの脱却を狙った取組など、地域の実情や特性に応じて様々な段階や方向があります。

このため、地域の実情や特性に応じて、地域の考え方をふまえ、地域自らの活動を育て、伸ばしていくといった地域の創意工夫を重視した施策展開が必要となります。

そこで、市町や関係団体と連携し、農業者等の意欲の増進をはかりつつ、自ら目標や方針を定めた計画づくりを進め、その実行を支援していくことを基本として、例えば、地域の農地やコミュニティの維持を中心とする取組をはじめ、集落営農に取り組む地域、農作物の付加価値向上に取り組む地域、自然を生かした誘客に取り組む地域など、幅広い地域課題の解決に向けた取組を促進していきます。また、柑橘や野菜など作目によってつながる産地や、直売所等を核とした多様な作目を生産する産地など、地域のめざす方向に応じた多様な産地形成の促進をはかっていきます。

(3) めざすべき将来の姿

三重県農業及び農村の活性化のためには、食に対する県民の多様化する期待に応えるとともに、将来にわたって農業が持続的に営まれることが重要です。

こうしたことをふまえつつ、三重県農業及び農村がめざしていきべき具体的な4つの姿を定めて、その実現に向け、計画的かつ着実な取組を進めていきます。

①安全・安心な農産物が、安定的に供給されている姿

- ◆効率的な生産体制のもとで多様化する消費者や実需者のニーズに的確に対応した生産が行われるなど消費者に信頼される農産物を安定的に提供するための生産・流通体制が整備されています。
- ◆行政による農薬等の使用や食品表示についての適切な監視・指導が行われるほか、生産、加工、流通に携わる人びとによる自主衛生管理が定着しています。

②多様な農業経営が確立され、本県農業が持続的に発展する姿

- ◆意欲ある農業経営体が確保・育成されるとともに、経営感覚あふれる農業経営の展開や農業団体の活発な活動が行われています。
- ◆農業の生産基盤が整備されることによって、地域の特性を生かした効率的な生産や農業者と消費者との交流などが活発に行われています。

③地域の特性を生かした取組が展開され、本県農村が振興される姿

- ◆農村地域の快適性や利便性、生産性が高まるとともに、農業の持続的な活動が行われる中で、地域住民の自主的な取組により「獣害につよい集落」が育成されるほか、生産者と県民との連携による多面的機能の維持増進のための活動が活発化することにより、その機能が十分に発揮され、地域の魅力や価値を高めています。
- ◆豊かな地域の資源を生かしたグリーン・ツーリズムへの取組促進により、都市住民等との交流が活発に行われ、さらには、地域内経済循環型産業等の新たなビジネスも創出され、その地域に暮らす一人ひとりが元気に輝き、地域の魅力が高まっています。

④本県農業及び農村を起点として、新たな価値の創出がはかれる姿

- ◆県民の皆さんに豊かで健全な食生活が広がる中で、満足感、環境や健康志向などを満たす新たな価値が積極的に提案され、地域資源の特徴を生かした競争力のある農産物や加工食品、サービス等が充実し、県内外に提供されることにより、農業の活性化と県民の皆さんの豊かな暮らしにつながっています。
- ◆農業者等による環境価値の創出のための取組が積極的に展開され、農業が県民や消費者から適正に評価、支持されています。

2. 三重県の農業及び農村の活性化に向けた施策の展開

県民生活の安定と地域経済の健全な発展に資するため、農業及び農村の果たす役割をふまえるとともに、めざすべき将来の姿の実現に向けて、次のとおり、4つの基本施策と主要な目標を定め、取り組んでいきます。

基本施策Ⅰ 安全・安心な農産物の安定的な供給

めざす方向

消費者に信頼される安全・安心な農産物を安定的に供給するため、効率的な生産体制のもとで多様化する消費者や実需者ニーズに的確に対応できる生産・流通体制の整備を進めます。

また、行政による農薬等の使用や食品表示についての適切な監視・指導を行うとともに、生産、加工、流通に携わる人びとによる自主衛生管理の定着を促進します。

現状と課題

食の安全・安心に対する消費者の関心が高まる中で、農業従事者の高齢化の進行や農産物価格の低迷などによる農業生産の活力低下が懸念されるとともに、農産物の貿易自由化に向けた動きが進むなど、農業をとりまく環境は大きく変化してきています。

こうした状況に対応するため、食料自給力の向上に向けた取組を進めるとともに、多様化する消費者のニーズに応えて、消費者や実需者に支持される高品質で安全な農産物を安定して提供するための生産から販売にいたる体制整備が求められています。

また、食の安全・安心の確保に関わる体制の整備は進んできていますが、口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザ、食品の不適正表示など食に関わるさまざまな問題の発生は依然として続いていることから、食の安全・安心に関する知識や情報などを消費者、生産者、食品産業事業者等が共有できるシステムづくりが重要となっています。

主な取組方向

食料自給力の向上に向け、国の戸別所得補償制度の本格実施等をふまえ、麦・大豆・新規需要米等の生産拡大や水田の有効利用を促進するとともに、園芸作物における既存産地の充実や新たな産地の育成に取り組むほか、畜産業については、生産技術や飼料自給力の向上、口蹄疫等の家畜伝染病にかかる監視体制の強化などによる安全・安心の確保を進めます。

また、茶、花き・花木、畜産などのブランド力の向上や、人と自然にやさしい生産技術、先進的なGAPやHACCP方式の導入などによる安全・安心の確保を進めるとともに、新技術の開発や技術移転の迅速化、農業者と実需者等との連携による農商工連携や6次産業化の促進等の取組との連携をはかりながら、県民等に支持される安全で安心な農産物を安定的に提供できる生産・流通・販売体制の構築に取り組みます。

さらに、農産物の生産から流通・販売にいたる過程での衛生管理や農薬等の生産資材

の適正な流通、使用などについて監視・指導を行うとともに、生産者、消費者等との連携により安全・安心の「見える化」などを進めます。

目標指標

施策目標項目	【現状値】 2010年度	【目標値】 2020年度
食料自給率(カロリーベース)	43% (2008年度)	51% (2019年度)
耕地利用率(田畑計)	89% (2008年度)	98% (2019年度)
GAP、土づくり、投入資源の効率利用を総合的に進める産地の割合	5%	75%

〔目標項目の説明〕

- ・県民が食料として消費する農水産物のうち県内農水産物により供給が可能な割合（農林水産省「三重農林水産統計年報」などにより算出）。2014年度の目標値は、2015年春に把握できる2013年度の概算値により測ることとします
- ・耕地面積における作付面積の割合（農林水産省「三重農林水産統計年報」などにより算出）。2014年度の目標値は、2015年春に把握できる2013年度の実績数値により測ることとします。
- ・「みえの安全・安心農業生産推進方針」に基づき、GAP手法の導入、土づくりの励行、投入資源の効率的な利用を総合的に推進している産地の割合（農水商工部農産物安全室調べ）

目標達成に向けた施策展開の内容

◆ I - (1) 需要に応じた水田農業の推進

食料自給力の向上のため、国の戸別所得補償制度の本格実施等をふまえ、麦・大豆・新規需要米等を戦略作物と位置づけ、消費者や実需者への需要開拓・拡大の促進に積極的に取り組むとともに、消費者に支持される米づくりなど需要に応じた生産や効率的な生産体制の構築を進めることにより、水田の有効活用をはかります。

◆ I - (2) 消費者ニーズに応える園芸等産地形成の促進

園芸等産地形成の促進に向けて、農商工連携や6次産業化なども含めた戦略的な産地経営や販路拡大などの取組への支援などを通じてリーディング産地等の育成に取り組むとともに、農産物直売所等を核とした多品目適量産地づくりを支援します。

◆ I - (3) 活力ある畜産業の健全な発展

安全で安心な畜産物の安定供給と畜産農家の経営安定に向けて、生産技術や飼料自給力の向上、畜産物の高付加価値化やブランド化、基幹食肉処理施設の機能充実、衛生管理の徹底や家畜伝染病監視の強化など、生産から流通・販売をとおした総合的な支援に取り組めます。

◆ I - (4) 農畜産物の生産・流通における安全・安心の確保

農畜産物等の安全・安心を確保するため、生産から流通・販売にいたる過程において農薬等の生産資材の適正な流通、使用などについて監視・指導を行うとともに、GAP手法等を活用した生産工程管理の推進に取り組みます。また、県民により信頼される農業をめざし、「みえの安全・安心農業」の定着に取り組むとともに、情報提供やリスクコミュニケーションの推進などにより、生産者、消費者等との連携による食の安全・安心の「見える化」を進めます。さらに、卸売市場の品質管理の高度化や市場の活性化を推進し、市場の運営管理の安定化を進めます。

基本施策Ⅱ 農業の持続的な発展を支える農業構造の確立

めざす方向

意欲ある多様な農業者を確保・育成するため、農地集積等による経営規模拡大や集落営農組織の設立を促進します。

また、農業者の経営発展や産地の強化・充実を支援するため、普及活動の効果的な展開や農業団体の活発な活動を促進するとともに、農業の生産基盤を整備します。

さらに、優良農地の確保、農業用水施設等の地域資源の有効活用、新品種等の研究開発を進めることにより三重県農業の持続的な発展に取り組みます。

現状と課題

三重県は、温暖な気候、南北に延びる細長い地形、海と山に囲まれた多様な自然の中で、京阪神、中京等の大消費地が近いという地理的条件のもと、多様な農業が営まれてきました。一方、県内には中規模都市が点在しており、他産業への就業機会にも恵まれていることから、農家の兼業化が進んでいます。加えて、若者の流出や農業従事者の高齢化もあり、農村では農業の担い手不足が深刻になるとともに、ライフスタイルの変化や国際化の進展などの影響を受け、農産物価格の低迷が続いています。

このような中、県民が安全・安心な食を安定的に享受できるとともに、農業に魅力を感じ、自らの職業として選択し、意欲的に農業経営に取り組むことができる環境を確立していくためには、関係機関が相互に連携した経営支援体制の整備や集落等の地域を単位として農地の利用調整を行い、意欲ある農業者に委ねていくしくみの構築、環境と調和した効率的で高度な生産基盤の整備が必要となっています。

主な取組方向

意欲ある多様な農業者の育成をはかるため、国の戸別所得補償制度等を効果的に活用し、持続的、発展的に経営を展開していくための支援を行うとともに、集落等を単位として持続的、安定的な営農体制を確立するため、集落営農組織等の設立や適切な運営、法人化等を支援します。

新たな経営体等の確保・育成をはかるため、財団法人三重県農林水産支援センター等と連携して、新規就農希望者や新規参入企業、障がい者等への就農支援や技術指導、雇用人となる農業者等への必要な情報の提供等を行います。

また、農業者の経営発展や産地の強化・充実を支援するため、普及活動の効果的な展開や農業団体の活発な活動を促進するとともに、「地域活性化プラン」の策定・実践に取り組む地域や産地等への支援、環境と調和した生産や流通の低コスト化、高度化に対応できる農業生産基盤の整備、農業用施設の機能維持のための取組を進めます。

さらに、耕作放棄地の再生等による優良農地の確保や農業用水等の地域資源の有効活用、新品種・新技術等の研究開発を推進し、三重県農業の持続的な発展に取り組みます。

目標指標

施策目標項目	【現状値】 2010年度	【目標値】 2020年度
農業経営体数(認定農業者、集落営農組織等)	2,385 経営体 (2009年度)	3,000 経営体
農業の安定的システムを確立している集落の割合	26.8% (2009年度)	75%
地域活性化プラン策定数	—	500

【目標項目の説明】

- ・積極的に経営改善や規模拡大をはかろうとする農業経営体（認定農業者及び集落営農組織等）の数（農水商工部農業経営室調べ）
- ・県内の農業集落に占める、集落等の地域を単位として農地や農作業の利用調整を行う体制が整っている集落の割合（農水商工部農業経営室調べ）
- ・地域や産地などを単位に策定される農業・農村の活性化のための将来プランの数（農水商工部農業経営室調べ）

目標達成に向けた施策展開の内容

◆Ⅱ－（１）地域農業の安定的システムの確立

営農や地域資源の活用を通じて地域経営を実践する集落や産地に対して、関係機関が連携して支援します。また、地域単位の持続的かつ安定的な営農のしくみづくりに向けて、集落営農組織等の設立や適切な運営、法人化の取組等への支援を行います。

◆Ⅱ－（２）多様な農業者の確保・育成

意欲ある多様な農業者の育成をはかるため、国の戸別所得補償制度等を効果的に活用し、経営の安定・発展のための支援を行います。また、新たな経営体等の育成・確保をはかるため、農業大学校の研修カリキュラムの充実や、財団法人三重県農林水産支援センター等と連携して新規就農希望者や農業参入企業、障がい者等への就農支援や技術指導等を行います。

◆Ⅱ－（３）生産・経営支援機能の充実

農業者の経営発展や産地の強化・充実に支援するため、普及活動の効果的な展開や農業団体の活発な活動を促進します。

◆Ⅱ－（４）農業生産基盤の整備

農業生産力の強化に向けて、環境と調和した生産や低コスト化、高度化に対応できる農業生産基盤の整備を進めるとともに、頭首工や用水路などの農業用施設の機能維持のための取組を促進します。

◆Ⅱ－（５）優良農地の確保

優良な農地の維持・保全や有効利用を促進するとともに、耕作放棄地の解消や未然防止対策を進めます。

◆Ⅱ－（６）農業を支える技術開発の推進

消費者や農業者等のニーズへの的確な対応と開発技術の早期実用化に向け、農産物の安定生産技術のほか、低コスト化や高品質化、商品化に向けた技術の開発に取り組みます。

◆Ⅱ－（７）畜産業を支える技術開発の推進

消費者や畜産農家等のニーズへの的確な対応と開発技術の早期実用化に向け、畜産物の安定生産技術のほか、低コスト化や高品質化、商品化に向けた技術の開発に取り組みます。

基本施策Ⅲ 地域の特性を生かした農村の振興と多面的機能の維持増進

めざす方向

農業の持続的な活動が行われる中で農村の機能が十分に発揮されていくよう、快適性や利便性、生産性の向上や地域住民の自主的な取組による「獣害につよい集落」の育成、生産者と県民との連携による多面的機能を維持増進する活動の活発化等に取り組みます。

また、農村地域に暮らす一人ひとりが元気に輝くとともに、地域の魅力が高まるよう、豊かな地域の資源を生かしたグリーン・ツーリズムへの取組促進による都市住民等との交流の活発化、地域内経済循環型産業等の新たなビジネスの創出等に取り組みます。

現状と課題

社会情勢の変化に伴い、農村地域では混住化、過疎化、高齢化が進むとともに、地域の基幹産業である農業等の低迷により、地域活力の低下や担い手不足が深刻化しています。特に、中山間地域では過疎化、高齢化の進行が著しく、集落や地域コミュニティの機能低下に加えて、野生鳥獣による農産物への被害の増加により耕作放棄地が増加するとともに、地域が有する多面的機能の維持も困難になりつつあります。

一方、「心の豊かさ」への志向などを反映して、美しい景観や伝統文化に恵まれた農村に対する「ゆとり」や「やすらぎ」などの多面的な機能の期待が高まっています。

こうした状況をふまえ、農業者や地域住民による地域の豊かな資源を生かした活性化をはかることにより、農業を支える基盤である農村の活力を向上していくことが重要となっています。

主な取組方向

農村地域の快適性、利便性や生産性の向上など地域の魅力が発揮できるむらづくりに向け、農村地域の生活環境や生産基盤の整備を進めます。

また、鳥獣害対策については、人の生活と自然との共生や生物の多様性を考慮するワイルドライフ・マネジメントの考え方にに基づき、「被害対策」と「生息管理」を組み合わせ総合的に実施していきます。そのため、狩猟や捕獲を進めるとともに、集落全体で対策活動について話し合い、行動する「獣害につよい集落」づくりを推進します。

さらに、人、自然、文化、農産物等の豊かな地域資源を生かしたグリーン・ツーリズムの推進による都市と農村の交流・共生を促進し、地域住民や訪れた人びとが満足できる魅力的な地域づくりや、地域に密着した地域内経済循環型産業等の新たな産業展開を促進することにより、元気なむらづくりを進めます。

農業がもつ多面的機能の維持増進をはかるため、地域住民や都市住民等などの多様な主体の連携により、社会共通資本である農地・農業用水等の地域資源の維持、向上に取り組めます。

目標指標

施策目標項目	【現状値】 2010年度	【目標値】 2020年度
農山漁村地域の主要交流施設利用者数	4,957千人 (2008年度)	5,270千人 (2019年度)
野生鳥獣による農業被害金額	464百万円 (2009年度)	324百万円以下 (2019年度)
農村の資源保全活動組織数	315組織	500組織

〔目標項目の説明〕

- ・農山漁村地域において、農山漁村のくらしや食文化、農林水産業等を身近に体験することのできる主要な施設の利用者数（農水商工部農山漁村室調べ）。2014年度の目標値は、2015年春に把握できる2013年度の実績値により測ることとします。
- ・サル、シカ、イノシシ、カモシカ、カワウ等による農業の被害金額（農水商工部農山漁村室調べ）。2014年度の目標値は、2015年春に把握できる2013年度の実績値により測ることとします。
- ・農業・農村のもつ多面的機能の重要性を理解し、多様な主体が参画する地域の農地・農業用施設や海洋環境等の保全活動を実施する組織数（農水商工部農業基盤室調べ）

目標達成に向けた施策展開の内容

◆Ⅲ－（１）魅力が発揮できる農村づくり

農村地域の快適性、利便性、生産性の向上など地域の魅力が発揮できる農村づくりに向け、生活環境や生産基盤の整備を進めます。

◆Ⅲ－（２）獣害につよい農村づくり

農村地域における鳥獣被害の軽減に向け、人の生活と自然との共生や生物の多様性を考慮し「被害対策」と「生息管理」を組み合わせた総合的な取組の促進をとおして、「獣害につよい農村づくり」を進めます。

◆Ⅲ－（３）交流・共生による元気な農村づくり

人、自然、文化、農産物等農村地域の豊かな地域資源を生かしたグリーン・ツーリズムの推進や地域に密着した地域内循環型産業等の新たな産業展開を支援することにより、元気な農村づくりにつなげます。

◆Ⅲ－（４）多面的機能の維持増進

地域住民をはじめ多様な主体による、水路や道路など生産資源の保全管理や生態系の保全、景観形成などの活動を促進することにより、農業及び農村のもつ多面的機能の十分な発揮と、農村における地域活動の活性化につなげます。また、中山間地域等の農地の耕作放棄地を未然に防止し、適切な農業生産活動が持続的に行われるよう、生産条件に関する不利を補正するための支援を行います。

基本施策Ⅳ 農業・農村を起点とした新たな価値の創出

めざす方向

県農業の活性化と県民の皆さんの豊かなくらしの実現に向けて、消費者の多様なニーズへの的確な対応と、満足感や環境・健康志向などを満たす新たな価値の積極的な提案を通じて、地域資源の特徴を生かした競争力ある農産物やそれらの加工品・サービスの充実をはかるとともに、県内や大都市圏等の消費者に効果的に提供していくための環境整備を進めます。

また、県農業が県民や消費者に支持されるよう、環境等への積極的な貢献に取り組む、環境創造型の生産活動等を促進します。

現状と課題

少子高齢化等により1人当たりの食料消費が減少するとともに、ライフスタイルの変化に伴う個食化、食の外部化・簡便化の進行により食生活における外食、中食、調理食品の利用が増えています。

加えて、消費者ニーズの多様化が進み、地域の個性的な食や農村の文化・風土に根づいたサービス等に対するニーズの高まりが見られる中で、農産物直売所、インターネットなどによる販売が拡大するなど農産物や加工食品等の流通形態が多様化しています。

こうした中、三重県農業が持続的に発展し、さらには成長産業となっていくためには、食育や地産地消運動の推進により食と農業の結びつきが強化されるとともに、消費のニーズを的確にとらえた経営の展開や付加価値の向上をとおして、新しいビジネスモデルが創出されていくことが必要です。

さらに、消費者に支持される農業を構築していくためには、生産活動における環境に配慮した取組の展開など、農業における環境価値の創出を促進していくことが求められています。

主な取組方向

県内の農業者や食品産業事業者自らが、消費者、実需者のニーズを的確に把握することができるよう、食育や地産地消運動の推進をとおした消費者と生産者のコミュニケーションを促進する機会の創出やしきみづくりなどの環境整備を進めます。

併せて、意欲ある事業者等を対象にした地域資源の高付加価値化やブランド化への支援により、新たなビジネスモデルの創出を促進するとともに、直売所等を核とした新たな域内流通のしきみづくりや大都市圏、海外へ向けた販路開拓の取組を支援します。

また、農村地域の特色ある地域資源を生かした地域内経済循環型産業等の創出・育成を促進することにより、農村地域の活性化をはかります。

さらに、生産活動における環境に配慮した取組の展開など農業による環境価値の創出の促進をとおして、県民や消費者に支持される農業の構築に取り組みます。

目標指標

施策目標項目	(現状値) 2010年度	【目標値】 2020年度
農業の価値創出に取り組む事業者数の伸び率	1.0	1.8
県内産品を意識的に購入する人の割合	35.0% (2009年度)	70%
大都市圏への販路拡大に挑戦し成果を得た事業者の割合	46.5% (2009年度)	70%

【目標項目の説明】

- ・みえの安心食材登録件数、県内直売所の参加生産者及び事業者数、三重ブランド認定事業者数、地域資源活用人材育成事業研修プログラム受講者数、マッチング交流会参加事業者数、首都圏流通拠点を活用した事業者数等の2010年度を基準とした伸び率の平均（農水商工部マーケティング室調べ）
- ・消費者が農林水産物等を購入する際に県内産を意識して選択する割合（農水商工部マーケティング室調べ）
- ・県が実施する大都市圏における販路開拓支援事業に参加した県内事業者のうち、取引の成立や販売の増加などの成果が得られたと回答した事業者の割合（農水商工部マーケティング室調べ）

目標達成に向けた施策展開の内容

◆Ⅳ－（１）食育・地産地消の推進

県内で生産される農産物を通じた健康で豊かな県民生活が実現されるよう消費者の期待と信頼に応える生産活動の促進をはかるとともに、NPOや地物一番協賛事業者等との協働による食育や地産地消運動の推進などにより、生産者と消費者の結びつきの強化をはかるための環境整備に取り組みます。

◆Ⅳ－（２）農業の環境価値創出の促進

農業の生産活動における環境に配慮した取組を支援することにより、県民に信頼され、支持される農業の構築や経営発展の促進に取り組みます。

◆Ⅳ－（３）新たなビジネス展開の促進

マーケットインの発想で農産物の高付加価値化やブランド化に挑戦する意欲的な農業者や食品産業事業者等を対象に、その取組に対する支援をとおして新しいビジネスモデルの創出を促進します。

さらに、農村地域の特色ある資源を生かしたビジネス展開の促進をはかるとともに、その取組を通じて地域内での経済循環を生み出していく地域内循環型産業等の創出・育成を促進することにより、農村地域の活性化につなげます。

◆Ⅳ－（４）新たなマーケティング戦略の展開

消費者ニーズや市場動向を把握・分析し、新たな需要を創造することを通じて、県産農産物の域内流通のしくみづくりや大都市圏、海外へ向けた販路拡大に取り組む事

業者を支援し、経営の発展と地域の活性化につなげます。

第4章 推進体制の整備

1. 計画の推進体制

計画に掲げる基本施策を着実に実施し、その目標を実現していくためには、農業生産に取り組む主体である農業者はもとより、消費者や関係団体、行政が連携をはかりながら、それぞれの役割に応じた積極的な取組が展開されることが重要です。

(1) 農業者に期待される役割

農業者には、計画推進の主役として、安全・安心な食料を安定的に供給するとともに、農業及び農村の多面的機能の発揮を通じて県土の保全や景観の形成などに貢献していることを認識し、地域経済を支える重要な産業としての農業に従事していることに誇りをもって自らの農業経営を展開していくことが求められます。

また、消費者との交流はもとより、食品産業等の他産業との連携協力に努めながら、安全・安心な食料の供給のための安全・安心農業生産に取り組むことにより、農業及び農村を起点とした新たな価値の創出に積極的に取り組んでいくことが期待されます。

(2) 農業団体等に期待される役割

農業団体等には、それぞれの団体の設置目的をふまえて、組織や機能の強化、県民や消費者や他産業との連携協力をはかりながら、意欲ある多様な担い手の育成・確保、優良な農地の確保・保全、産地形成、販路開拓、6次産業化や農商工連携等による新たな価値の創出、農村地域の活性化などへの支援を行っていくことが期待されます。

(3) 他産業に期待される役割

食品産業等の他産業には、農業者と同様に、安全・安心な食を供給するとともに、県産農産物の利用や農業者との連携協力の促進、県内外への情報発信、県産食材の供給等を通じて、三重県農業及び農村の活性化に貢献することが期待されます。

(4) 県民に期待される役割

県民には、単に食料を購入・消費するだけでなく、農業及び農村の果たしている役割を理解するとともに、広く国際的な情勢や地球環境問題などについての情報を入手し、食に対する知識や食を選択する力を身につけることが求められています。

また、地産地消運動などへの参画はもとより、農業者との交流活動や農地や農村の保全活動等にも積極的に参画することなどが期待されます。

(5) 市町に期待される役割

地域主権社会の実現に向けた動きが加速してきている中で、市町には、農業者や農村地域住民にとってもっとも身近な行政機関（基礎自治体）として、そのエリアにおける農業及び農村の活性化を促進する役割が期待されています。このため、市町は、農業及び農村施策の展開にあたって、関係機関や団体等との連携をはかりつつ、地域段階における創意工夫に基づく農業者や集落、産地等の主体的な取組を引き出し、支援していく

ことが期待されます。

(6) 県が果たす役割

県は、全県的な視野で、安全・安心な食料の安定的な供給や三重県農業を支える意欲ある多様な担い手や新規就農者等の育成・確保、農村を維持、活性化するための農村地域施策に取り組みます。

また、基礎自治体である市町や、農業団体との密接な連携のもと、

- ①安全・安心な農業生産に取り組む産地やブランド形成、高付加価値化、多様な担い手が意欲と経営感覚をもって持続的に農業経営を展開していくことができる環境づくりなど、創意工夫に基づく農業者や地域等の主体的な取組に対する支援
- ②普及指導活動などによる、生産技術面におけるスペシャリスト機能、経営発展促進面や地域活性化面等におけるコーディネート機能の発揮などを通じた、地域の主体的な取組に対するマンパワーを生かした支援
- ③農業者や消費者のニーズ、食品関連企業等の多様なニーズ・シーズ、急速に変化する社会情勢等をふまえた、長期的視点からの研究開発、生産等の現場で直面する諸課題の解決につなげる視点からの研究開発の実施
- ④市町が行う農村地域施策に対する補完と支援

など、地域の実情に即した農業及び農村の活性化に取り組んでいきます。

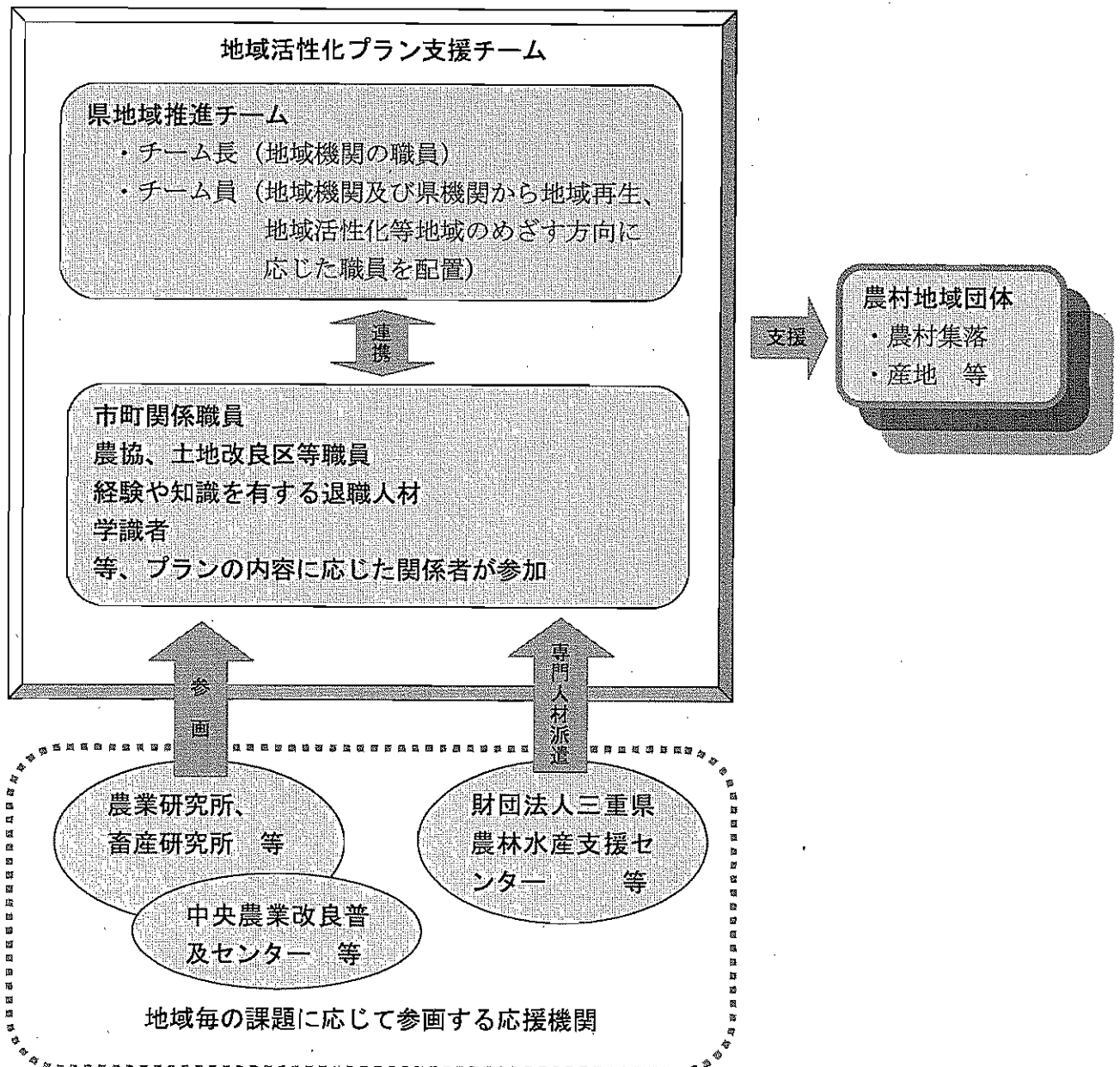
2. 地域活性化プランへの支援

農産物の安定供給や多面的機能の維持増進など農業及び農村が果たすべき基本的役割は、農業が将来に渡って持続的に展開されることで発揮されます。

そのためには、農業及び農村の活性化に向けた取組として、集落や産地など地域の創意工夫のもと、農地、景観、文化などの地域資源を有機的に結び付け、効果的に活用する取組を農業者のみならず非農家を含む地域の住民が、一体となって実行することが必要です。

これには、地域が主体となり、地域が有する資源の棚卸しを実施するとともに、その資源を有効活用して、地域の価値を高める「地域経営（マネジメント）」の取組を実践することが必要であり、そのためには、地域の総意による活性化に向けた「地域活性化プラン」の策定と、プランに基づく取組が確実に実践されていくことが重要です。

●支援チームの構成イメージ

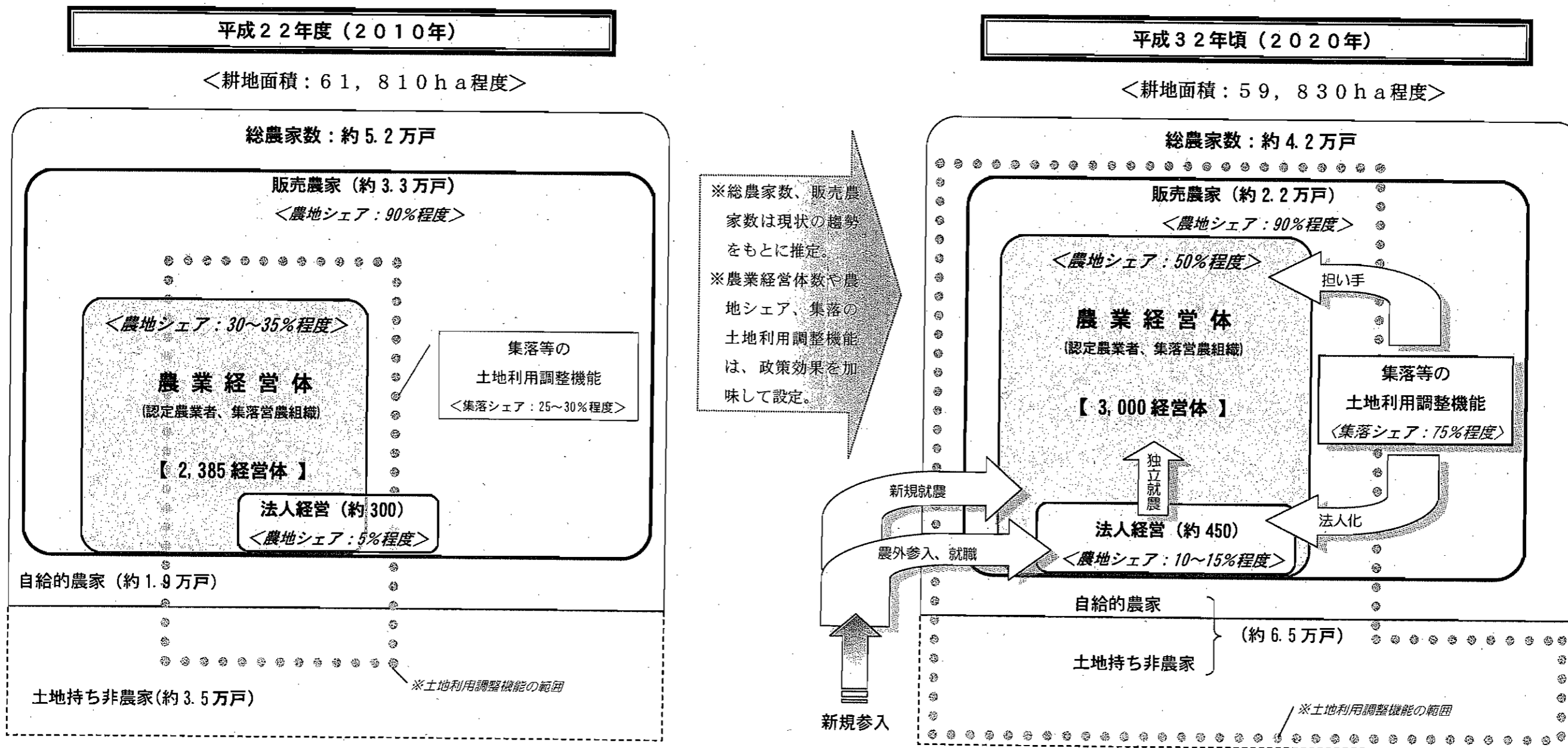


三重県食を担う農業及び農村の活性化に関する基本計画（仮称）（中間案）における
 主要品目毎の生産見通し

品 目 名 等		平成20年度 【現 状】	平成32年度 【目 標】	比較増減 【H32-H20】
耕 種 農 業	水田作物	40,090ha	44,350ha	4,260ha
	米（新規需要米を除く）	30,982ha	30,000ha	△ 982ha
	新規需要米 （米粉用米・飼料用米等）	118ha	1,930ha	1,812ha
	麦	5,670ha	7,420ha	1,750ha
	大豆	3,320ha	5,000ha	1,680ha
	園芸作物	10,880ha	10,720ha	△ 160ha
	その他	3,825ha	3,525ha	△ 300ha
	作付合計面積	54,795ha	58,595ha	3,800ha
畜 産	牛	33,190頭	33,200頭	
	豚	119,700頭	120,000頭	
	鶏	6,125千羽	6,130千羽	
耕地面積		61,810ha	59,830ha	△1,970ha
耕地利用率		89%	98%	9%
食料自給率（カロリーベース）		43%	51%	8%

三重県における平成32年頃の農業構造の展望（イメージ）

- 平成32年頃の農業構造は、高齢化によるリタイア等から農家数が大きく減少するものの、集落等の土地利用調整機能に基づく経営規模の拡大や戸別所得補償制度の活用などにより、農地の9割程度が販売農家によって担われる。
- 認定農業者を主とする担い手農業者が中心となって、集落等の土地利用調整機能を生かして集落営農組織等の主たる担い手となるとともに、こうした組織が農業法人に発展したり、法人経営に雇われた人が技術や経営ノウハウを身に付けてから家族経営者として独立したりするなど、家族経営と法人経営が相互に連携・循環して成り立つ。
- 農業経営や農村内での6次産業化の取組、農業法人以外の法人の参入や農商工等の連携が進むとともに、集落や産地を単位とした「地域経営」の視点を取り入れたさまざまな取組が展開されることにより、意欲ある農業者の創意と工夫による経営発展が実現され、持続的に発展する本県の農業・農村の姿が展望される。



※本資料は、2010年世界農林業センサス（概数値）及び2005年世界農林業センサス等から推計しています。

三重県農業及び農村の活性化のための取組モデル（案）

1. 経営の効率化や規模拡大等による経営改善のモデル（例示）

経営類型	基幹作目及び経営規模	家族労働力	目標所得	想定地域
主穀中心		人	万円	
個別経営型	水稲 18ha、小麦 12ha、大豆 12ha 計 30ha（自作地 2ha、借地 28ha）	2	640	平坦地
集落営農組織型	水稲 18ha、小麦 12ha、大豆 12ha 計 30ha（自作地 30ha）	15	1150	中山間
野菜作				
ハウストマト （ロックウール）	抑制Ⅰ型 40a、抑制Ⅱ型 30a、半促成Ⅰ型 40a、 半促成Ⅱ型 30a 計 70a（自作地 70a）	3	530	平坦地
露地野菜	キャベツ 3.2ha、はくさい 2.0ha、ばれいしょ 0.8ha 計 4.0ha（自作地 2.0ha、借地 2.0ha）	3	500	平坦地
果樹				
かんきつ	極早生温州 0.5ha、早生温州 0.5ha、不知火 0.3ha、 カラ 0.3ha 計 1.6ha（自作地 1.1ha、借地 0.5ha）	2.5	610	中山間（伊勢志摩・東紀州）
花き・花木				
施設鉢物	シクラメン 50a、その他鉢物 40a 計 50a（自作地 50a）	2	760	全域
茶				
個別経営型	せん茶 3.0ha、かぶせ茶 9.0ha、買い芽 4.0ha 計 12.0ha（自作地 4.0ha、借地 8.0ha）	2.5	800	北勢・中南勢
酪農				
フリーストール方式	経産牛 100頭	3人	1110	全域
肉用牛				
和牛雌肥育	黒毛和種雌 150頭、稲わら収集 17.9ha	2人	660	全域
養豚				
養豚繁殖肥育一貫	繁殖雌豚 100頭、繁殖雄豚 4頭	2人	640	全域
養鶏				
採卵鶏	採卵鶏 50,000羽	2人	1200	全域
銘柄肉用鶏	肉用鶏 22,000羽	2人	700	全域

2. 一層の効率化や多角化等による経営発展のモデル（例示）

I. 超大規模の土地利用型農業法人経営

①経営発展のポイント

- ★米・麦・大豆延べ300haを、集落エリアを越えて広域で請け負う超大規模法人経営
- ★2世代による法人経営、1,000万円／人を超える役員所得を確保
- ★社員5人を雇用し、700万円／人の給与を支払う雇用創出型の経営を実践

②経営発展モデルの概要

◆経営面積		◆経営収支		◆労働力	
水稻（移植）	60ha	粗収益	19,700万円	役員	2名
小麦	120ha	経営費	17,000万円	社員	5名
大豆	120ha	法人所得	2,700万円	パート	5名

③さらなる経営発展につなげていく取組の例

- ★直営の加工販売施設「おにぎり工房」で、生産した米と地元野菜の漬け物を具材に使ったおにぎりを直売
- ★平坦地の病虫害発生が少ない水田で有機米を栽培し、輸出ノウハウを有する米卸業者を通じて海外へ輸出
- ★畜産農家との契約により、稲ホールクroppサイレージ用稲を湿田や麦跡水田で栽培することで、水田の高度利用と収益向上を実現

II. 地域ぐるみで6次産業化に取り組む集落営農組合

①経営発展のポイント

- ★集落一農場の営農組合を設立、地域の水田を最大限に活用して米・麦・大豆を生産
- ★地場農産物を積極的に使用する食品産業事業者との契約栽培で、大豆の実需を確保
- ★水田や水稻作業を営農組合に任せた農業者が、集落内の畑や不作付け地などを利用して直売所での販売向けに、多品目適量の野菜づくりに取り組む
- ★女性・高齢者等集落内の多様な人材が、特産品開発や農産物直売所運営に取り組む

②経営発展モデルの概要

◆経営面積		◆経営収支		◆労働力	
水稻	18ha	粗収益	8,000万円	主要オペレーター	7名
小麦	12ha	農産物売上等 3,400万円 作業受託収入 100万円 直売所売上 4,500万円		補助オペレーター	7名
大豆	12ha			事務担当	1名
作業受託				直売所担当	3名
田植え	3ha	農業経営費	2,800万円		
水稻収穫	5ha	直売所経営費	4,000万円		
		所得	1,200万円		

③さらなる経営発展につなげていく取組の例

- ★農地・用水路、そこに棲む希少生物の保全活動などを通じた非農家や都市住民との交流活動を発展させ、不作付け地を活用した市民農園ビジネスを実施
- ★量販店との提携により、農産物直売所の支店を市街地のスーパーマーケット店舗内にオープン
- ★新たな転作作物としてソバに着目、農産物直売所に「そば道場」を増設して都市住民等を対象にしたソバ打ち体験を実施